

沖縄国際センターに於ける日本語研修関係資料

1. 日本語専修コース実施要領

(1) コース名

① コース名

(和文) (特設) 日本語専修(B) (技術協力一般部門)

(英文) Intensive Japanese Language for Technical Cooperation

② 研修期間

昭和63年9月29日から平成元年5月29日まで(日程詳細は別添付-2参照)

③ 定員及び割当国

(定員) 8名

(割当国) 9ヶ国 割当人数

① 中国	2名
② インドネシア	1名
③ フィリピン	1名
④ タイ	1名
⑤ 大韓民国	1名
⑥ ケニア	1名
⑦ ザイール	1名
⑧ パラグアイ	1名
⑨ ミクロネシア	1名

(2) 本コースの目的

本コースは、わが国が開発途上諸国への技術協力計画の一環として事業を実施しているプロジェクトタイプの技術協力事業及び専門家派遣事業等に拠って派遣された専門家のカウンターパート、相手国政府の技術協力窓口担当者、その他相手国政府が推薦する研修員を対象として日本語を修得せしめ、①技術協力の円滑な実施、効率的な技術移転、②プロジェクト担当者及び専門家一般市民との日本語によるコミュニケーションの拡大、③日本語で書かれた技術文献等の読解力の強化、④日本製供与機材の

効率的運用操作・維持管理マニュアル等の読解力の強化、⑤日本の社会・文化、国情、日本人の考え方、価値感等に対する理解と友好の促進を図ること、等の諸点により相互理解を深め、国際協力を促進することを目的としている。

(3) 到達目標

本コースの到達目標としては次の五段階を設定し、各段階の目標を通し、日本語の運用能力を高め、技術協力事業の円滑な促進を図る為の要員を育成する。この為、本コースの修了者には技術の習得、技術協力業務の実施に係る日本語の運用能力をつけることを目標とする。

- ① 第一段階 日本で生活する上での必要最小限の日本語会話能力の習得。発音、文法運用の面で不完全さがかなりあるにせよ、挨拶、食事、買物等、生活の基本的場面で一応のコミュニケーションができる段階。ひらがなの全部と、ある程度のカタカナが読め、かつ、書け、ごく一部の必要最小限の漢字が読めること。
- ② 第二段階 ある程度の日常会話に加えて、技術協力の現場で日本人専門家の日本語によるごく簡単な説明・指示等が理解でき、かつ、事務に関する初歩的な漢字が一部読め、かつ、書けること。
- ③ 第三段階 日常生活においてやや進んだ一般的会話ができ、技術協力プロジェクトの内容等に関して専門家及びプロジェクト担当者との簡単な打合わせができる段階。基本的な漢字がある程度読め、かつ、書けること。
- ④ 第四段階 日常生活における一般的会話はもとより、技術協力事業に関連する基本的な表現ないし語彙の一部を使って、専門家及びプロジェクト担当者との事務連絡ないし手続きがある程度できること。基本的な漢字のかなりの程度を読んで理解でき、かつ、そのある程度のものは書けること。また、辞書類等を利用して、日本語で書かれたごく簡単な事務書類及び資機材の簡単なパンフレットないしマニュアル等を読んで理解できること。
- ⑤ 第五段階 日常生活においてかなり進んだ一般的会話ができ、技術協力事業に関連する基本表現ないし語彙をある程度使って、専門家及びプロジェクト

ト関係者との事務的・内容的な質疑応答がある程度できること。基本的な漢字がかなりの程度読め、かつ、書けること。また、辞書等を利用して、プロジェクト関連技術文献ないし書類にあらわれる表現ないし語彙等のうち、基本的なものは、かなりの部分、理解できること。更に、ごく簡単なレポート・記録・日誌等が日本語で書けること。

以上の各段階を通じて技術協力事業に関連する日本語表現及び典型的な事務・打合せ手続き等の基本的表現一般を修得し、JICA技術協力事業の概要を理解するとともに、JICAのプロジェクトにおける技術協力・技術移転の効果的推進に寄与することが期待されている。

(4) 研修内容

別添カリキュラム（付-1）の通り。

(5) 研修方法

ア. 教授法

- ① 日本語専修コースでは、ローマ字による母語等の干渉を避けるために、原則として漢字・かな表記によって指導を行う。
- ② 文字学習の導入時期は、音声と文字との連合の訓練ができるだけ長く行われるように、学習の最初から音声導入とともに同時に入る。
- ③ 文字学習のやり方としてはH. E. Palmerのいう記述像 (motor graphic image) の形成を重視する。
- ④ 教室作業は口頭練習を主体に行い、媒介語の使用は必要最小限にとどめ、日本語による指導を中心とする。
- ⑤ テキストは、初級 (Vol.1～Vol.3) については構造文型中心に、中級 (Vol.4～Vol.5) については表現意図中心に構成され言語材料 (linguistic competence) を提供しているが、言語活動 (communicative competence) を増強するという視点から、適宜、場面・伝達内容・言語機能的側面等を念頭に置いた指導を行う。

イ. 日本語能力評価

テキスト各分冊終了時を目安に、担当講師作成の試験等による中間評価を、適宜

行う。また、日本語コース終了時に、現在教材開発事業計画において作成中の認定試験を実施する予定。

ウ. Language Laboratory (LL教室)

授業計画の一環としての定日利用の外、授業時間以外に研修員が復習等の目的で行う課外随意利用時間(昼休みや放課後の一定時間)を設けることも考慮する。

エ. 見 学

日本語コース進行の各段階において技術関連分野の研究機関、教育機関、企業等及び日本事情紹介に関連する施設ないし、地域を見学し日本語学習に対する動機付けを高める。

オ. 演 習

日本語学習の初級段階終了時以降、JICA各機関及び技術協力事業に携わる行政・研究・教育機関ないし企業等の協力を得、日本語を使った演習を行い、技術協役に役立つ日本語の運用を合目的に学習するとともに、JICA事業への理解を促進する。

カ. 研修旅行

日本語コースの中間及び最終段階で、日本語学習の成果を踏まえた応用実地訓練として、日本各地の技術関連研究・教育機関及び企業等の視察及び文化施設等の見学を実施する。

(6) 研修員の参加資格要件

① G. I. 記載の応募条件

- (a) 所定の手続に基づき、政府により指名された者であること。
- (b) 当事業団が海外において実施しているプロジェクト等のカウンターパート、技術協力関係窓口担当者及び相手国政府が推薦する者で、現在または将来、指導的立場にある者。
- (c) 35歳以下であり、大学卒業、あるいは、それと同等以上の学力を有すること。
- (d) 8ヶ月の長期に亘る日本語学習に耐えられる精神力を有する者であること。
- (e) 心身ともに健康であること。妊娠中の者はコース参加資格を有しない。

② 人選方法

選考手続きは以下の手順による。

- (a) コース開始の約6ヶ月前にコースの目的・概要・応募手続等を記入した General Information (G. I.) が割当国に対して、日本大使館ないし当事業団在外機関を通じて配布される。
- (b) 相手国政府より日本大使館ないしは当事業団在外機関を通じ要請書が提出される。(提出締切日昭和63年8月1日)
- (c) 当事業団は、(財)沖縄県語学センターの参加のもとに選考会を開催し、各候補者の受入れ可否を決定する。
- (d) 相手国政府に対し、日本大使館ないしは当事業団在外機関を通じ、各候補者の受入れ可否を通知する。(最終受入通知日：昭和63年9月1日)

(7) 応募と選考状況

割 当 国	応募人員	受入回答数	受入実績
① 中 国	2	2	2
② インドネシア	2	1	1
③ フィリピン	2	1	1
④ タ イ	2	1	1
⑤ 大 韓 民 国	1	1	1
⑥ ケ ニ ア	1	1	1 *
⑦ ザ イ ー ル	1	1	1
⑧ パ ラ グ ャ イ	0	0	0
⑨ ミ ク ロ ネ シ ア	2	0	0
合 計	13	8	8

*11月16日付で研修中断し、東京にて技術研修を実施

(8) 研修教材・資機材

① 使用テキスト

「技術研修のための日本語」(初級及び中級) 国際協力事業団編
(Japanese an Integrated Conversational Approach)
Vol.1、Vol.2、Vol.3、Vol.4、Vol.5

② その他のテキスト及び資機材

上記テキストの他に、分野別テキスト、専門コース別テキスト、専門用語集、

絵教材、VTR、OHP、スライド等の教材も必要に応じて適宜使用する。

(9) 研修付帯プログラム

① ブリーフィング

研修員の来日直後に、当センター（OIC）にて実施する。

ブリーフィングにおいては、研修員登録、研修員のパスポート及びビザの有効期間確認、支給される諸手当の説明、研修スケジュールの説明、その他日常生活を送る上での諸注意等を行う。

② オリエンテーション

昭和63年10月3日から10月7日まで、OICにて実施する。

オリエンテーションにおいては、当事業団の業務概要説明のほか、日本の文化、政治、経済等、日本事情全般についての講義を行い、研修員の日本に対する理解を深めることとする。

③ エヴァリュエーション・ミーティング

研修コース終了時の平成元年5月26日にOICにて実施する予定である。

エヴァリュエーション・ミーティングにおいては、当事業団、(財)国際協力サービスセンター、担当日本語講師、及び、研修員が出席し、研修全体についての総括的な意見交換及び評価を行う。

④ 閉講式

上記エヴァリュエーション終了後、平成元年5月26日、エヴァリュエーションに引き続き実施する。

閉講式において、各研修員に対して、研修修了証（certificate）が授与される。

(10) 研修事後評価

① 評価の目的

本コースの実施・運営状況を把握し、研修効果並びに研修員の要望を測定、評価することにより、コース実施上の問題点を明らかにし、それらの分析・検討を通じ、コースの質的改善を図る。

② 評価の方法

コースの終了後、研修員より提出のあったエヴァリュエーション、シート・ファイナル・レポート及び日本語能力認定試験結果等を参考に、研修内容に対する研修員の理解度及び要望等を把握する。また、当事業団研修実施担当者並びに研修受託機関担当者等の出席のもとに反省会を設け、総括的な意見交換及び評価を行い、次年度以降のコースの質的向上を目指すこととする。

昭和63年度 日本語専修(B)コース 研修日程

10 月		11 月		12 月		1 月	
午前	午後	午前	午後	午前	午後	午前	午後
1 土		1 火	L-10	1 木		1 日	
2 日		2 水	L-11	2 金	富士島 研修旅行	2 月	休み
3 月	ゼネラル・オリエンテーション	3 木	文化の日	3 土		3 火	
4 火		4 金	L-11	4 日		4 水	新年会 日本人の生活
5 水		5 土		5 月	手紙の演習 L-21	5 木	L-31 L-31
6 木		6 日		6 火	L-21	6 金	L-31 L-32
7 金		7 月	L-12	7 水	L-22	7 土	
8 土		8 火	L-12	8 木	L-23	8 日	
9 日		9 水	L-13	9 金	L-23&24	9 月	L-32 L-32
10 月	体育の日	10 木	L-14	10 土		10 火	L-33 L-33
11 火	開講式	11 金	L-14	11 日		11 水	L-33 L-34
12 水	L-1, ひらがな	12 土		12 月	L-24	12 木	L-34 L-34
13 木	L-2, ひらがな	13 日		13 火	L-25	13 金	L-35 L-35
14 金	L-3, ひらがな	14 月	L-15	14 水	L-26	14 土	
15 土		15 火	L-15, 復習	15 木	L-26&27	15 日	成人の日
16 日		16 水	分冊1 習熟度試験	16 金	L-27	16 月	代 休
17 月	L-4, かな習熟度テスト	17 木	試験のKR情報	17 土		17 火	L-35 復習
18 火	L-4, カタカナ	18 金	野外研修	18 日		18 水	L-36 L-36
19 水	L-4, 漢字入門	19 土		19 月	L-28	19 木	L-36 L-37
20 木	L-5	20 日		20 火	L-29	20 金	交流会準備 交流会
21 金	復習	21 月	L-16	21 水	L-30	21 土	
22 土		22 火	L-16&17	22 木	L-30	22 日	
23 日		23 水	勤労感謝の日	23 金	分冊2 習熟度試験	23 月	L-37 L-37
24 月	L-6	24 木	L-17	24 土		24 火	L-38 L-38
25 火	L-7	25 金	L-18	25 日		25 水	L-38 復習
26 水	L-7	26 土		26 月	試験のKR情報	26 木	L-39 L-39
27 木	L-8	27 日		27 火	日本人の生活	27 金	L-39 L-40
28 金	L-9	28 月	L-19	28 水	日本人の生活	28 土	
29 土		29 火	L-19&20	29 木		29 日	
30 日		30 水	L-20	30 金	休み	30 月	L-40 L-40
31 月	L-9			31 土		31 火	L-41 L-41

2月		3月		4月		5月		
午前	午後	午前	午後	午前	午後	午前	午後	
木 L-41	復習	1 水 L 6 ガス器具の説明書	L 6 ガス器具の説明書	1 土		1 月	中級復習 中級復習	
木 L-42	L-42	2 木 L 6 ガス器具の説明書	L15 水の Cutter	2 日		2 火	中級復習 中級復習	
金 L-42	L-43	3 金 L15 水の Cutter	L15 水の Cutter	3 月	L10 インフォメーション	L10 インフォメーション	3 水	憲法記念日
		4 土		4 火	関東研修旅行計画	関東研修旅行計画 研修員による説明会	4 木	
		5 日		5 水			5 金	子供の日
月 L-43	L-43	6 月 ニュース, L15	演習: VTR機器の使い方	6 木			6 土	
火 L-44	L-44	7 火 L11 日本の春	L11 日本の春	7 金			7 日	
水 L-44	L-45	8 水 L11 日本の春	L12 台風のニュース	8 土			8 月	中級習熟度試験
木 L-45	L-45	9 木 L12 台風のニュース	L12 台風のニュース	9 日			9 火	雑誌制作 雑誌制作
金 復習	復習	10 金 演習準備	演習: 気象台見学	10 月			10 水	雑誌制作 雑誌制作発表会
	建国記念日	11 土		11 火		代休	11 木	ドラマ・シナリオ制作
		12 日		12 水		研修旅行レポートと発表準備	12 金	分冊6 L1・2 主な言い方、ドラマ・シナリオ制作
	分冊3 習熟度試験	13 月 ニュース	L 4 依頼とことわり	13 木	L19 コンピュータ	研修旅行レポート	13 土	
火 試験のKR情報	研修旅行説明会	14 火 L 4 依頼とことわり	L 4 依頼とことわり	14 金	L19 コンピュータ	研修旅行報告会	14 日	
	関西研修旅行準備	15 水 L 6 申し出と許可	L 6 申し出と許可	15 土			15 月	L 3・4 主な言い方とドラマ・シナリオ制作
		16 木 L 6 申し出と許可	L 8 時計	16 日			16 火	L 5・6 主な言い方とドラマ・シナリオ制作
		17 金 L 8 時計	L 8 時計	17 月	ニュース	L19 コンピュータ	17 水	L 7・8 主な言い方とドラマ・シナリオ制作
	関西研修旅行	18 土		18 火	L19, 20	L20 通信新時代	18 木	L 9・10 主な言い方とドラマ・シナリオ制作
		19 日		19 水	L20 通信新時代	L20 通信新時代	19 金	L11・12 主な言い方とドラマ・シナリオ制作
		20 月 ニュース	演習: ビデオ・スキット	20 木		演習: ワープロの使い方	20 土	
	代休	21 火	春分の日	21 金	雑誌: 編集会議	雑誌制作 (ワープロ)	21 日	
水 研修旅行レポート・中級説明会		22 水 L 2 水道の水	L 2 水道の水	22 土			22 月	ドラマ制作
木 初級復習	初級復習	23 木 L 2 水道の水	L 2, 3	23 日			23 火	ドラマ制作
金 初級復習	研修旅行発表会	24 金 L 3 せっけん工場の 見学	L 3 せっけん工場の 見学	24 月	雑誌制作 (ワープロ)	L16 現代の養殖	24 水	ドラマ制作 ドラマ発表会
		25 土		25 火	L16 現代の養殖	L16 現代の養殖	25 木	閉講式スピーチ準備
		26 日		26 水	L18 有機農業	L18 有機農業	26 金	閉講式
月 ニュース	L 1 自動販売機	27 月 ニュース, L14	L14 大量生産	27 木	L18 有機農業	演習: 農業機関訪問	27 土	
火 L 1 自動販売機	L 1 自動販売機	28 火 演習: 浄水・下水処理場, 工場見学		28 金	雑誌制作 (ワープロ)	雑誌制作 (ワープロ)	28 日	
		29 水 L 5 地下鉄の案内標識	L 5 地下鉄の案内標識	29 土		天皇誕生日	29 月	
		30 木 L 5 地下鉄の案内標識	関東研修旅行概説	30 日			30 火	
		31 金 L10 インフォメーション	関東の地理と交通				31 水	

2. 日本語専修コース（B）実施報告

上記コースの日本語研修は、昭和62年10月12日より昭和63年5月27日まで、沖縄県語学センターが(財)国際協力サービス・センターより委託され、沖縄国際センターにおいて実施した。以下にその実施状況を報告する。

報告者 西郡 仁朗 浜崎 盛康
 祖慶 寿子 川中 孝子
 金城 尚美 兼本 敏
 バントロイヤー朋子

研修コース名：第6回 日本語専修コース（B）

研修期間：昭和62年10月12日～昭和63年5月27日

研修員名：

No.	氏名	国名	年令
1	A	中国	41
2	B	インドネシア	30
3	C	インドネシア	31
4	D	ケニア	34
5	E	ケニア	32
6	F	マーシャル諸島	36
7	G	ネパール	26
8	H	パキスタン	27
9	I	フィリピン	35
10	J	タイ	26
11	K	タイ	31

(年令は研修開始時のもの)

(1) 実施概要

当日本語専修コースは事業団の実施する技術協力・技術移転事業において、相手国側に、一般的な日本語・各技術分野についての日本語及び日本人・日本文化を熟知した人材を養成することによって、その事業を円滑に進めることを目的として開設されている。

本コースは6回目を迎えたが、今回からは実験的に研修期間が二ヶ月延長され8ヶ月

月コースになった点、ならびに初級段階で2クラスに分けて指導が細密になるようにした点で特徴がある。また標準的評価法の試行導入や漢字学習CAL(Computer Assisted Learning)の体系的導入等、過去の経験を踏まえ様々なコース運営上の改良がなされた。特に今回の研修員は日本語の履修動機・能力が比較的が高く、コース運営も円滑に進んだ事から、コース運営上成果をあげることが出来たと考えられるうち重要な要素となった点を以下に記す。

・研修期間の延長：

従来の日本語専修コースは6ヶ月の研修であったが、本コースは初級者を対象として設置されており、制限時間内で上記目的を達成するのは時間的にきわめて困難であった。語学の性質上、初級から上記目的に到達するためには最低一年の研修が必要であると思料される。また、途上国における日本語学習熱の高まりから、既習者の来日及び来日希望が増加しつつある状況を踏まえると、中級・上級コース・帰国研修員の再研修コースの設置も急務である。

今回、このための第一段階の措置として、研修期間を8ヶ月間に延長したが、これは次の様な好結果を生んだ。初級修了までには4ヶ月弱を要し(分冊3までの学習に課外活動・行事等を含めた実質時間)、従来は残り2ヶ月強の期間で中級内容の学習、修了制作ファイナル・レポートをしあげなければならぬため、完結した内容にするのが困難であり、研修員・講師双方に大きな荷重がかかっていたが、8ヶ月にすることで初級・中級・修了制作とも、かなり完結した充実感のある研修が可能になったと思われる。しかしながら、今回は研修員の質が比較的高く、所謂「おちこぼれ」ができなかった点はその背景にある(下記「研修員の能力について」参照)。以前の研修コースの研修員をも含めて思料すれば、言語能力の低い者・動機の伴わない者もおり、そうした者が一名でもいると、研修期間の延長は完全に逆効果となろう。今回は期間延長が成功したが、今後は8ヶ月の研修を初級4ヶ月・中級4ヶ月に分け、中間段階で進級制度を設けて優秀者のみを継続研修させる、あるいは能力別編成に移行するなどの措置を講じておく必要があると思われた。

・研修員の能力について：

従来のコースでは、本国での業務にあたり必ずしも日本語能力が要求されていな

いと推察される研修員が含まれていた。また、語学学習に不向きな者もあり、初級単独コースという本コース設定の性質上能力別編成等の措置が困難なため、彼ら自身の心理的負担となるばかりでなく、他の研修員にも悪影響を及ぼす傾向がみられた。しかし、今回の研修員の場合、このような深刻な問題はほとんどなかった。ほぼ全員が本国の業務での日本語の必要性及び学習動機が高く、かつ能力的に見ても多少の差はあったものの悪影響を生じる程ではなく、全体の水準が高かったのが特色である。

(因みに、前回のコースと同一内容の試験を行った聴解の習熟度試験では、平均点で分冊1：29%、分冊2：17.4%、分冊3：16.5%という非常に大きな差異が出ている。)これには、前記初級でのクラス分け等、今回講じた教務上の措置が功を奏した側面もあろうが、やはり動機や基礎能力がより重要な鍵を握っていたと思料される。今回は研修員募集の際、要綱の意図がよく反映されていたと思われるが、今後も動機・業務上の必要度の高い研修員が受入れられることを望みたい。

(2) 研修目的と基本シラバス

ア. 研修目的

事業団における技術研修は、英語を媒介語として実施されているが、専門家などの日本人担当者とのコミュニケーションや、技術書の多くが日本語で記されている点等を考慮すると、日本語に習熟した人材の養成が重要となってくる。

また、日本人や日本の社会・文化等を理解した人材はわが国の協力するプロジェクトを円滑に進める上で大きな役割を果たすであろう。

かかる人材を養成するため、主に技術協力プロジェクト・専門家のカウンターパートの研修員を対象に8ヶ月の日本語集中研修を行った。(言語能力上の到達目標については2-2「基本シラバス」参照)

イ. 基本シラバス

① 初級段階(昭和62年10月～昭和63年1月)

主教材：「技術研修のための日本語」分冊1～3

日本語による基本的なコミュニケーション技能を習得する。オーラル・アプローチを主たる教授法として用い、会話に重きを置いた教室・L1教室での口頭

練習を中心に運用能力を高めていく。また、聴解を独立した技能として重視し、アナライズ・クイズを中心とした正確な聞き取りと、タスク・リスニングを中心とした合目的で情報の取捨選択が必要な聞き取りの、二つの方法で指導する。

表記については、まず、開講直後に「ひらがな」を集中的に学習する。「カタカナ」は「ひらがな」習得後、認識と弁別を集中的に学習し、さらに継続的にも学習して定着を図る。また、「カタカナ」とともに基礎的な「漢字」を導入していく。教材・試験等は、全て「漢字かな混じり文」とし、文字の必要性への認識を高める。漢字の導入については教室内での水書道・字源を中心とした指導のほか、放課後にCALを体系的に使用し、字形と筆順に関する学習を行う。

② 中級段階（昭和63年2月～5月）

主教材：「技術研修のための日本語」分冊4・5

研修員が帰国した後の技術移転現場で必要と予想される言語項目を、演習形式で学習する。原則的に一週間を一単位とし、週末に行われる工場見学などの野外研修での日本語のスムーズな運用を学習目標とする。週日の教室授業では、テキストから演習内容に該当する課を抜粋して学習する。

上記のほか、時事問題を取り上げて学習し、その背景知識として必要な日本の文化・社会的な諸側面についても紹介していく。

③ 各課の進行

初級・中級段階における、各課の進行・時間配分を、表1-a、bに示す。

表1-a 初級での各課の進行と時間配分
(一つの課は以下の段階に沿って進行する)

- | |
|--|
| A. 前課の復習とクイズ |
| B. 新しいことば、ドリル1（文型を中心とした口頭ドリル） |
| C. LL授業（ドリル1をLL機器を用いて復習） |
| D. ドリル2（場面での用法を中心とした口頭ドリル） |
| E. 対話（テキストの対話の読み方とロールプレイ、ビデオ、フィードバック） |
| F. 漢字（各課の使用漢字・理解漢字の紹介と練習、放課後CALを用いて再度練習する） |

(各課の所要時間：平均7.5時間＝3コマ)

表1-b 中級での各課の進行と時間配分

曜	午 前	午 後
月	週間復習クイズ 前週のニュースのまとめ 「ニュースで学ぶ日本語」	第m課 対話導入 練習1 (口頭ドリル)
火	第m課 練習2 (作文練習) 対話	・ニュースの発表 第m課 漢字 読解
水	第m課 聴解クイズ 第n課 対話導入	・ニュースの発表 第n課 練習1 (口頭ドリル) 練習2 (作文練習)
木	第n課 対話 漢字	・ニュースの発表 第n課 読解
金	第n課 聴解クイズ 演習準備	演習

④ 試 験

次の2種の試験を適宜行い、その成績をフィードバックすることによって、授業進行の参考とし、研修員の自らの日本語能力に関する自覚を促し、動機を高める。

- a. 各課毎のクイズ・・・分冊1～3が終了した翌日、文法項目・語彙を盛り込んだ筆記試験を行う。また、漢字カタカナのクイズも同時に行った。
- b. 習熟度試験・・・各分冊が終了した時点で、言語技能別（聴解・文法・会話・読解・文字）の習熟度試験を行う。このうち、分冊1～3の聴解、分冊1の文法・読解の試験は、JICA作成の日本語能力認定試験を用いる。

⑤ 野外研修と研修旅行

日本語学習への動機づけと現実場面での言語運用能力の向上、及び、日本人と日本の文化・社会の理解のため、学習内容に則した野外研修を多く取り入れる。その際、課題作業を必ず伴わせる。

研修の中期に関西への、後期に東京への研修旅行を行い、日本語能力の実際場面での活用と、日本の社会・文化・歴史等に対する理解を深める。

⑥ 教 材

本コースにおいては、以下に列挙する教材を使用する。

〔主教材〕技術研修のための日本語（初級）分冊1（JICA）

技術研修のための日本語（初級）分冊2（JICA）

技術研修のための日本語（初級）分冊3（JICA）

技術研修のための日本語（中級）分冊4（JICA）

技術研修のための日本語（中級）分冊5（JICA）

〔補助教材〕 Grammar Notes（JICA）

かな入門（国際交流基金）

CAL対応漢字ワークシート（初級分冊1～3）（講師作成）

タスク・リスニング課題集（初級分冊1～3）（講師作成）

アナライザー・クイズ集（初級分冊1～3）（講師作成）

LLオーディオ・テープ（JICA編）（講師作成）

VTR教材（国立国語研究所編）（JICA編）

OHP文型指導教材（講師作成）

スチール・ビデオ教材（講師編集）

絵教材（海外技術者研修協会編）（JICA編）（講師作成）

分冊4聴解ワーク・シート（講師編集）

中級演習用ハンド・アウト（講師作成）

（クイズ等）

かなクイズ（講師作成）

文法筆記クイズ（講師作成）

漢字カタカナ・クイズ（講師作成）

習熟度試験（分冊別、読解・文法・会話・文字）（講師作成）

（参考書籍）

英和・和英辞典（洋販刊）

外国人のための漢字辞典（文化庁刊）

(貸与機器等)

テープレコーダ (L1機能付き)

テレビ

ワープロ (雑誌編集用)

(3) 研修経過

ア. 総論

開講直後の一週間で文字導入を終了し、音節を単位とする日本語の特色の把握・母国語の干渉の防止・音声と文字の連合を徹底して指導した。ひらがな版のテキストを使用するので、文字習得が必要不可欠である点を強調したので比較的スムーズに導入できたが、研修員にとっては相当の負荷となった模様である。

文字導入と同時に、分冊1の学習を開始した。基本シラバスの項にも記したように、直接法(主にオーラル・アプローチ)を用いて基礎文型の口頭練習を徹底的に行い、文法的・知識的な解説よりも技能としての言語能力を重視した。各研修員とも、この方法論を納得し、反発はほとんどなかった。開講時点でこの方法論の有効性をかなり強調しておいたのが、直接法を円滑に使用できた一因であると思われる。

基本的な漢字も、かな習得後すぐに、字源の紹介・水書道・CAL等を利用し、単調な学習にならないように配慮しながら導入した。

分冊1では2時限ないし2時限半で1課を終えるペースで進め、5課毎に文型を中心とした復習の時間を定期的に設けた(補助教材として文型練習用「文作くん」を制作した)。分冊2では、導入文型が多い上に複文・重文が主であるため、後れの目立つ研修員が出てきた。そこで3時限で1課を終えるペースとし、研修員の把握度を確認しながら進度を調整した。分冊3ではまた単文に戻り、簡単で有用な文型が比較的スムーズに導入できた。また、この間聴解能力養成のため、従来の文法・文型の宿題に加えて、タスクリスニング教材を各課ごとに与えた。

以上初級段階では、日本語の文字・基礎的な文型の定着・それを有効に利用できるストラテジーの学習能力に重きを置き、約4ヶ月をかけて指導した。

後半の中級は、演習形式で毎週その週の具体的目標を設定し、目標のために教科書(分冊4・5)の該当課を選択的に学習するシラバス(合目的学習: Goal

oriented learning) をとった。例えば、週の日標が週末に気象台へ行って「気候に関する情報取りをする」というものである場合、終日の授業では、そのための準備として第11課「日本の春」・第12課「台風のニュース」を学習した。この方法をとることによって、演習とテキスト授業を有機的に絡み合わせ、従来中だるみが目立っていた中級の学習への動機を維持しようと試みた。また、中級では「ニュース」を通じた学習も取り入れ、時事問題・文化問題にも目が広がるよう配慮した。

イ. 文 字

〔ひらがな〕

音声体系と文字体系を同時に導入し、清音・濁音・促音・長音・文型（応用発展）の順で導入した。教材として「かな入門」（国際交流基金）を用い、異言語間の音声カテゴリーの違いを留意した小テスト（講師作成）・習熟度試験などを通じて母国語からの干渉の防止を目指した（評価の項参照）。詳細なスケジュールを作成し、講師間の連携を緻密にして進められたが、一部研修員の習得が不完全であったため、その後も各課別のクイズなどで書記の機会が多くなるように努めた。

〔カタカナ〕

ひらがな学習後直ちに開始した。ひらがなの書記上の混同が予想されたため、この時期では認識のみに留め、街の看板などの外来語が読み取れるよう練習した。書記については、分冊3終了時まで継続して各課毎の文字のクイズ（漢字カタカナ・クイズ）を行い、最終的にはほぼ全員が習得した。

〔漢字〕

カタカナ学習後直ちに開始した。3種類目の文字の出現にかなり辟易としていたが、その必要性を強調し、字源・水書道等を用いて導入し始めた。今回からCALを本格導入することもあり学習対象漢字を新たに決定した。決定するに当たって以下の基準を設け、参考とした。①使用頻度の高いものから導入する。②教科書の内容とリンクしている。③字の構造が単純なものから導入していく（画数・部首）、このようにして、分冊3までに約500字の読みと書きを導入した。中国系以外の研修員にとって、漢字は初めて目にするものであり、視覚的に自然にパターンを認知していくことは非常に難しい。今回は、上記導入順への配慮・CALなどの使用によって従来に比べると効果が上がったように思われるが、その記憶の維持について

はまだまだ問題が多い。一度導入された漢字が、その場限りにならず記憶の中に定着させるには、さらに研究が必要である。

ウ. 発音

音声と文字教育を同時にスタートすることによって、母国語の干渉を避け、音声と文字の連合の長期間訓練を目指した。ロール・プレイなどを通じ、流暢性 (Fluency) が向上するよう配慮したせいで、分冊 3 までの初級段階では発話数と速度の面ではかなりの向上が見られたが、反面、正確性 (Accuracy) には問題の多い研修員が出た。特に、タイの研修員は母国語の干渉から脱することが難しく、初期におけるさらに徹底した矯正と、中間段階での体系的なチェックを今後の検討課題としたい。

エ. スピーチ

初期の段階では「対話」における練習の他に、野外研修で自己紹介をする機会や、交流会などは常会話だけでなく、何かより深いテーマをもって日本人と語り合う機会を出来る限り設けた。

初級後半 (1 月初旬) に日本語専修全員によるスピーチ大会を行ったが、これは年末年始休みを有効に学習の為に利用する上で効果があったと思われる。また、この大会で沖縄県の外国人によるスピーチ大会の出場者を選抜した。チュタラ・バット・クワスの三名が代表となったが、大会ではクワスが銀賞を獲得した。チュタラにとって、この大会への出場は相当の心理的負担となり、心配されたが、それを克服したことが大きな自信となり、以降の学習に好ましい影響を与えた。

また、修了直前の研修としてドラマ「OIC 殺人事件」を制作した。ドラマのあらすじは講師が与えたが、台詞や細かな演出は研修員が行い、予想以上の成果が上がった。

オ. 書き取り及び作文指導

当初よりクイズ・宿題を通じて基本文型を用いた作文の訓練を施し、分冊 4 では聞き取りのワークシートを用いた訓練を行った。また、日本語学習の応用実践を兼ねた研修旅行・交歓会・訪問などの後で、礼状やレポートの書き方を指導した。特に中級段階では、毎週当番制で身近なニュースをまとめる作文練習を宿題のひとつとし (「OIC かわら版」)、その集大成として、修了間近に雑誌「ハイビスカス」を

刊行した。この雑誌制作では、取材・記事制作・ワープロ作業・編集等の大部分を研修員に任せたのでよい経験になったのではないと思われる。加えて、事業団への最終報告書の添削等を行った。

カ. L. I.

初級段階では、各課の口頭ドリル後、授業の一環として40分程入りオーディオ・テープを用いた句型練習の仕上げ、アナライザ機能を用いたクイズ、ビデオやスチール・ビデオを用いた口頭練習等を行った。

キ. 研修の軌跡 (一覧)

授業の進行、野外研修、研修旅行の軌跡の一覧を表 a に示す。

表 a 研修の軌跡 (一覧)

日 時	授業の進行	日 時	授業外活動	内容および備考		
10/12	開講式 分冊1学習開始 ひらがな導入 初級 ひらがな習熟度 テスト カタカナ導入開始 分 間 1 漢字導入開始 (CAL使用開始)	10/7	オリエンテーション開始	・「でいご」「ゆうな」の2 クラスで開始		
		10/16	<野外研修> 日本語サバイバル・ トレーニング	・国際通りで必要不可欠な日 常表現を実践		
		10/27	ワールド・ウチナー・ フェスティバル参加			
		10/30	Eating Out	・研修員と講師の夕食親睦会 (焼き肉)		
		11/5 ~12	館外宿泊	・OICを離れソーサーインと ポート観光に宿泊		
		11/13	分冊1習熟度試験			
		11/15	皇太子殿下OIC御見学	・アンディがL.L教室で挨拶		
		11/16	分冊2学習開始 初級	11/21	<野外研修> 浦添小学校PTAと クッキング・パーティー —資料a参照—	・研修員が各国の料理、浦添 小PTAが日本料理を作り交 歓
				11/25	大分県青年との交流会	
				11/31	研修旅行1(石垣島)	・登野城小学校との交流会

	分冊		～12/1	—資料b参照—	・島内見学など (引率：西部・兼木)
	冊		12/12	〈野外研修〉 沖繩キリスト教短期大学との 交流会	・テイボーン先生のスピーチ コミュニケーションのクラ スと交流
12/23	分冊習熟度試験		12/25	〈野外研修〉 お茶会	・座波建設の日本家屋・日本 庭園で研修課・崎山さん指 導
			1/1	浦添市長宅訪問	・比嘉昇市長の招きで年始
1/4	新年会		1/2	語学センター所長宅訪問	・和氣所長の招きで年始
1/5	分冊3学習開始		1/12	日本語専修コース スピーチ大会	・県スピーチ大会の代表選考 を兼ねる
	初級		1/16	岩手県青年の輪 船上パーティー	
			1/19	国際親善の夕べ	・ルル・エルソン司会
	分冊		1/20	〈野外研修〉 南風原中学校との交歓授業 —資料c参照—	・自衛について説明
	冊		2/5	参議院・外交安全調査会来訪	・懇談会
2/10	分冊3習熟度試験		2/12	NHK FMラジオ出演	・各国の歌を紹介(生放送)
			2/15	研修旅行2	・金閣寺・清水寺・平安神宮
			～19	京都・広島 —資料d参照—	・平和祈念館・マツダ自工等 見学(引率：祖慶・照屋)
2/22	分冊4・5学習開始		2/27	沖縄県・外国人による スピーチ大会	・クワス、バット、チュタラ が参加(クワスが銀賞とな る)
	中級		2/29	夜間コンピュータ講習	・中級演習の一環
			～3/4		
	分冊		3/10	NHK ラジオ・カーの取材	
	冊		3/25	〈野外研修〉 気象台見学	・中級演習の一環
			4/9	研修旅行3	・築地・SONYメディアアワール F・国会・皇居・浅草等見
			～14	東京	

	4			学(引率:祖慶・川中)
			4/16	01C バス・ハイク
			4/19	東京研修旅行報告会
	5		4/20	チュ、一日郵便局長
		フ	4/21	粕谷沖細開発長長官来訪
		ア		
		イ		宿泊研修
		ナ		希望が丘「ジョイフル」
		ル		
5/9	中級習熟度試験			・海洋博記念公園へ
5/10	雑誌制作開始			
5/17	雑誌「ハイビスカス」 発表会	レ		・LL授業見学、アムノイ挨拶
5/18	ドラマ制作開始	ポ		・浄水場・下水処理場・オリ
5/25	ドラマ「01C 殺人 事件」発表会	ト		・オンビール見学
5/27	評価会 閉講式			・恩納村青年との交流会

3. 日本語研修使用教材

沖縄国際センターにおける日本語研修で用いた教材を以下に列挙する。

(1) 集中講習

〔主教材〕 「技術研修のための日本語」分冊1～6 (JICA編)

〔補助教材〕 1. “GRAMMATICAL NOTES” (JICA)

2. 「かな入門」(国際交流基金編)

3. “E/J, J/E DICTIONARY” (洋販刊)

4. 「日本語基礎語辞典」(国際交流基金編)

5. 「外国人のための漢字辞典」(文化庁編)

6. 書きことばCAL (OIC日本語研修室・富士通共同開発)

7. 書きことばCAL対応漢字ワーク・シート

(OICH日本語研修室編)

8. 「トップ・ダウン聴解教材」(「タスク・リスニング」を改題・

再編、OICH日本語研修室編)

9. 「ボトム・アップ聴解クイズ」(「アナライザー・クイズ」を改題・

再編、OICH日本語研修室編)

10. 「ストラテジック・リーディング」(OICH日本語研修室編)

11. 「イラスト付作文教材」(OICH日本語研修室編)

12. LL用テープ (JICA編)

13. OHP文型指導教材 (OICH日本語研修室編)

14. スティル・ビデオ教材 (OICH日本語研修室編)

15. 絵教材 (海外技術者研修協会編)

(JICA編)

(OICH日本語研修室編)

16. ビデオ教材 (国立国語研究所編)

(JICA編)

(OICH日本語研修室編)

17. 各課 筆記宿題 (O I C日本語研修室編)
 18. かなクイズ (O I C日本語研修室編)
 19. 文法筆記クイズ (O I C日本語研修室編)
 20. 漢字カタカナ・クイズ (O I C日本語研修室編)
 21. 日本語能力認定試験 (JICA編)
 22. 習熟度試験 (O I C日本語研修室編)
- その他

(2) 一般講習

〔主教材〕 JAPANESE CONVERSATION : 50 HOURS (JICA編)

〔補助教材〕 1. ビデオ教材 (JICA編)

(OIC日本語研修室編)

2. 文型・語彙・絵OHP (OIC日本語研修室編)

3. 絵教材 (海外技術者研修協会編)

(JICA編)

4. 聴解マステリー・クイズ (OIC日本語研修室編)

5. “SIMPLE CONVERSATION IN JAPANESE” (JICA編)

4. 評 価

(1) 評価の方法

各言語運用技能についての評価を次の基礎資料をもとに決定した。

- 文法・文型・・・教室活動、分冊毎の「文法」の習熟度試験、各課毎の文法のクイズ
・レポート・新聞記事・スピーチの添削、宿題
- 会話・・・・・・教室活動、分冊毎の「会話」の習熟度試験、スピーチ
- 聴解・・・・・・教室活動、分冊毎の「聴解」の習熟度試験、LL授業、宿題
- 読解・・・・・・教室活動、分冊毎の「読解」の習熟度試験
- 文字・・・・・・教室活動、かな習熟度試験、分冊毎の「文字」の習熟度試験、宿題、
各課の文字クイズ

それぞれの実施方法・効果・問題点を以下に列挙する。

ア. クイズ：初級分冊1～3では各課の終了した翌日に、文法に関するクイズと、漢字とカタカナに関するクイズ、聴解に関するアナライザ・クイズの3種を施行した。このクイズは、指導した項目の理解・定着の度合が確実に把握でき、クイズの結果から適切な復習項目が選択でき、クラス活動に適切な緊張感を与える効果がある。また、即時フィードバックを行うので矯正効果が強く、各研修員に自らの能力に自覚を促す効果がある。また、誤用例等を通じて分冊終了時のまとめと復習に適切な項目を選択できる。ただ、各課毎に3種類のクイズを行うため、授業内での次の課のドリル時間が、ややもすると短くなってしまふ。また常に改善の努力はしているが、クイズ内容が妥当かどうかによる危険が伴う。さらに、研修員が必要以上の競争意識を抱く可能性があり、講師の配慮・采配が必要である。

イ. 宿 題：初級分冊1～3では、6課から文法に関する筆記の宿題とCAL対応の漢字ワーク・シート及びタスク・リスニングの宿題を課した。特にタスク・リスニングの宿題は、前回の研修コースから講師が作成し始めたものであり、当日分の宿題を講師総出で当日作ると我々にとっては過酷なものであったが、初級3分冊については試用版が一応完成し、宿題として課すだけの効果のあるものができたと確信して

いる。

また、今回は漢字ワーク・シートの他に、漢字CALによる履修を各課終了日の放課後有志6名に宿題として課した。

こうした宿題を与えることによって、書写力・聴解力の向上、導入文型の定着の強化を図ることができる。また、教室授業では目の届かなかった項目についての補強が可能である。ただ、添削に時間がかかる点、新たなものを作成する場合の講師側の労力、会話力への結びつけ方が問題となる。

ウ、分冊毎の習熟度試験：

各分冊の終了時に「文法」「聴解」「会話」「文字」「読解」の習熟度試験を行い、言語の各技能についての習熟度を検査した。当研修より、試験項目を言語技能によって細分化し、技能別の能力が確認できるよう目指した。

このテストで分冊の定着率を把握し、次の分冊への準備としての能力アップを図ることができる。試験の内容については、今後も改良は加えて行くが、今後の研修についても同様の技能別試験を行い、成績をプールして当センターの標準的な試験とする予定である。

(2) 評価結果（総合評価と試験別結果）

以上の方法で評価した研修員の日本語能力を以下の通り示す。

- (1) 総合評価（日本語集中講習評価表）
- (2) 分冊1 習熟度試験結果
- (3) 分冊2 習熟度試験結果
- (4) 分冊3 習熟度試験結果
- (5) 中級習熟度試験結果
- (6) 研修員個人別成績推移記録

注) それぞれの試験の表には、粗点(%)と基準化得点(偏差値)が示されている。

また、分冊毎の習熟度試験では、技能別の粗点(%)に重みづけを行って総合点を算出した。

ア、分冊学習熟度試験結果

11月13日実施

点：%、(偏差値：deviation)、(上位5名：TOP 5)

研修員名	文法	読解	聴解	会話	漢字	合計
A	91.4 (69.0)(1)		95.8 (67.1)(1)	80.2 (56.1)(4)	86.7 (61.8)(1)	89.4 (71.9)(1)
B	71.4 (43.7)()		71.4 (39.3)()	84.7 (64.6)(1)	40.0 (32.5)()	68.8 (36.4)()
C	77.1 (50.9)(5)		70.8 (33.6)()	73.0 (42.5)()	80.0 (57.6)(3)	74.9 (46.9)()
D	88.6 (65.7)(2)		87.5 (56.0)(4)	83.3 (62.0)(2)	70.0 (51.3)()	82.6 (60.2)(2)
E	65.7 (36.5)()		75.0 (39.3)()	69.3 (35.5)()	76.7 (55.5)(5)	71.4 (40.9)()
F	65.7 (36.5)()		87.5 (56.0)(4)	70.7 (38.1)()	80.0 (57.6)(3)	76.1 (49.0)(5)
G	74.3 (47.4)(4)		75.0 (39.3)()	79.3 (54.4)(5)	46.7 (36.7)()	70.0 (38.4)()
H	74.3 (47.4)()		83.3 (50.4)()	83.3 (62.0)(2)	83.3 (59.7)(2)	80.7 (56.9)(3)
I	80.0 (54.6)(3)		87.5 (56.0)(4)	77.0 (50.0)()	46.7 (36.7)()	75.0 (47.1)()
J	71.4 (43.7)()		88.0 (56.6)(2)	74.7 (45.7)()	60.0 (45.0)()	74.7 (46.6)()
K	80.0 (54.6)(3)		88.0 (56.6)(2)	71.3 (39.2)(3)	76.7 (55.5)(5)	80.0 (55.7)(4)

平均：MEAN 76.4 83.0 77.0 67.9 76.7

標準偏差：STANDARD DEVIATION (7.9) (7.5) (5.3) (15.9) (5.8)

重み：WEIGHT 30% 30% 20% 20%

イ、分冊2習熟度試験結果

12月23日実施

点：%、(偏差値：deviation)、(上位5名：TOP 5)

研修員名	文法	読解	聴解	会話	漢字		合計
A	87.5 (66.2)(1)	100.0 (67.3)(1)	82.6 (64.9)(1)	87.5 (55.0)(4)	86.7 (55.1)(4)		93.4 (69.5)(1)
B	68.8 (50.3)(5)	75.0 (52.7)(4)	65.2 (44.9)()	79.8 (47.8)()	83.3 (52.1)()		73.7 (48.9)()
C	71.9 (52.9)(4)	50.0 (38.0)()	65.2 (44.9)()	62.5 (31.7)()	76.7 (46.3)()		67.1 (42.0)()
D	78.1 (58.2)(3)	75.0 (52.7)(4)	78.3 (60.0)()	95.0 (61.9)(2)	90.0 (58.0)(2)		83.6 (59.3)(2)
E	81.3 (60.9)(2)	62.5 (45.3)()	70.0 (50.4)(5)	80.0 (48.0)()	76.7 (46.3)()		75.4 (50.7)()
F	53.1 (36.9)()	62.5 (45.3)()	56.5 (34.9)(4)	84.6 (52.3)()	66.7 (57.6)(3)		63.9 (38.6)()
G	68.8 (50.3)(5)	37.5 (30.7)()	82.6 (64.9)(1)	85.6 (53.2)(5)	86.7 (55.1)(4)		76.1 (51.4)(5)
H	68.8 (50.3)(5)	87.5 (60.0)(2)	73.9 (54.9)(4)	97.8 (64.5)(1)	90.0 (58.0)(2)		82.1 (57.7)(3)
I	68.8 (50.3)(5)	87.5 (60.0)(2)	70.0 (50.4)(5)	90.2 (57.5)(3)	86.7 (55.1)(4)		78.8 (54.2)(4)
J	43.8 (28.9)()	62.5 (45.3)()	65.2 (44.9)()	64.0 (64.0)()	53.3 (25.7)()		57.1 (31.5)()
K	62.5 (44.9)(3)	75.0 (52.7)(4)	56.5 (56.5)()	76.8 (76.8)()	93.3 (60.9)(1)		71.3 (46.4)(4)
平均：MEAN	68.5	70.5	69.6	82.2	80.9		74.8
標準偏差：STANDARD DEVIATION	(11.7)	(17.1)	(8.7)	(10.8)	(11.4)		(9.5)
重み：WEIGHT	25%	10%	25%	20%	20%		

ウ、分冊3習熟度試験結果

% (score, deviation), (TOP 5)

研修員名	聴解	文法 読解	漢字 カタカナ	会話			合計
A	94.7 (63.9)(2)	94.3 66.0(1)	95.0 (69.1)(1)	95.7 (65.6)(2)			94.9 (71.5)(1)
B	73.7 (47.4)()	65.7 (39.7)()	39.5 (36.3)()	88.6 (49.7)(5)			69.5 (39.6)()
C	78.9 (51.5)(5)	68.6 (42.4)()	50.0 (42.5)()	83.2 (37.5)()			72.0 (42.7)()
D	78.9 (51.5)(5)	94.3 (66.0)(1)	60.0 (48.4)()	94.1 (62.0)(3)			85.2 (59.3)(3)
E	63.2 (39.1)()	77.1 (50.2)(4)	77.5 (58.8)(3)	82.7 (36.4)()			75.1 (46.6)()
F	84.2 (55.6)(3)	68.6 (42.4)()	62.5 (49.9)(4)	88.7 (49.9)(4)			76.7 (48.7)(5)
G	84.2 (55.6)(3)	50.0 (34.5)()	57.5 (46.9)()	86.7 (45.4)()			72.4 (43.2)()
H	100.0 (68.0)(1)	88.6 (60.8)(3)	57.5 (46.9)()	96.0 (66.3)(1)			88.6 (63.6)(2)
I	68.4 (43.2)()	77.1 (50.2)(4)	62.5 (49.9)(4)	87.4 (47.0)()			75.4 (47.0)()
J		74.3 (47.6)()	40.0 (36.6)()	88.3 (49.0)()			68.6 (38.5)()
K	63.2 (39.1)()	77.1 (50.2)(4)	87.5 (64.7)(2)	84.9 (41.3)()			77.1 (49.2) 4)
平均	77.0	76.9	62.7	88.8			77.8
標準偏差	12.7	10.9	16.9	4.5			7.9
重み	25%	35%	15%	25%			

エ. 中級習熟度試験結果

5月9日実施

点：％、(偏差値：deviation)、(上位5名：TOP 5)

研修員名	文法	読解	聴解	会話	漢字	ニュース	合計
A	68.0 (57.4)(4)	84.0 (61.7)(1)	80.0 (61.4)(2)	87.7 (53.0)()	93.3 (60.9)(1)	87.5 (64.6)(1)	82.0 (65.5)(1)
B	48.0 (38.9)()	68.0 (52.0)()	64.0 (50.2)(5)	74.9 (36.3)()	53.3 (30.8)()	81.3 (59.3)(2)	64.4 (43.6)()
C	52.0 (42.6)()	76.0 (56.8)(4)	60.0 (47.4)()	81.5 (44.9)()	53.3 (30.8)()	75.0 (54.4)(3)	66.7 (46.4)()
D	72.0 (61.1)(1)	64.0 (49.6)()	52.0 (41.9)()	98.9 (67.7)(1)	86.7 (55.9)(4)	68.8 (49.4)()	73.0 (54.3)()
E	64.0 (53.7)()	76.0 (56.8)(4)	64.0 (50.2)(5)	87.1 (52.3)()	73.3 (45.8)()	65.6 (46.8)()	72.1 (53.1)()
F	28.0 (31.5)()	48.0 (39.9)()	60.0 (47.4)()	72.9 (33.7)()	73.3 (45.8)()	56.3 (39.2)()	57.1 (34.5)()
G	68.0 (57.4)(4)	56.0 (44.8)()	76.0 (58.6)(3)	89.3 (55.1)(3)	80.0 (50.8)()	75.0 (54.4)(3)	73.4 (54.7)(5)
H	48.0 (38.9)()	80.0 (59.3)(3)	76.0 (58.6)(3)	94.9 (62.5)(2)	93.3 (60.9)(1)	75.0 (54.4)(3)	76.5 (58.6)(3)
I	72.0 (61.1)(1)	68.0 (52.0)()	84.0 (64.1)(1)	84.7 (49.1)()	93.3 (60.9)(1)	75.0 (54.4)(3)	78.5 (61.1)(2)
J	64.0 (53.7)()	40.0 (35.1)()	56.0 (44.7)()	75.3 (36.8)()	80.0 (50.8)()	65.6 (46.8)()	61.7 (40.2)()
K	52.0 (42.6)()	84.0 (61.7)(1)	64.0 (50.2)(5)	89.3 (55.1)(3)	86.7 (55.9)(4)	71.9 (51.9)()	73.8 (55.2)(4)
L	72.0 (61.1)(1)	32.0 (30.3)()	28.0 (25.2)()	88.0 (53.4)(5)	80.0 (50.8)()	37.5 (24.0)()	55.8 (32.8)()

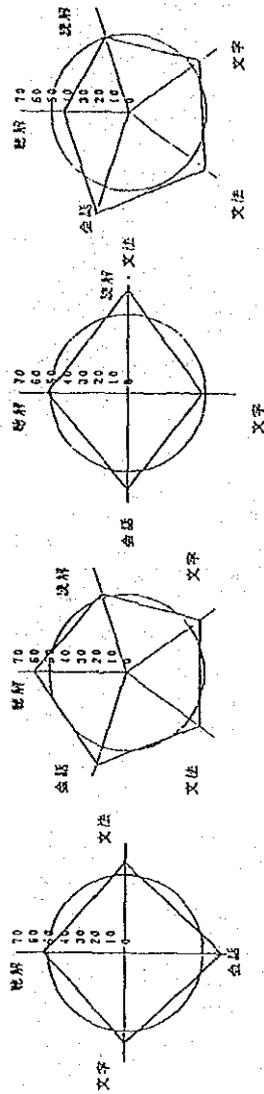
平均：MEAN 60.0 64.7 63.7 85.1 78.9 69.5 69.5

標準偏差：STANDARD DEVIATION 10.8 16.6 14.4 7.6 13.3 12.3 8.0

重み：WEIGHT 20% 20% 20% 20% 10% 10%

習熟度
試験

グループ内偏差値



分組 1

分組 2

分組 3

印刷

文型クイズ

3 票を1Blockとして
まとめた得点率(%)

漢字

カタカナ

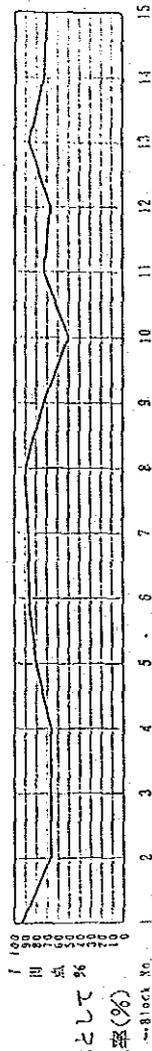
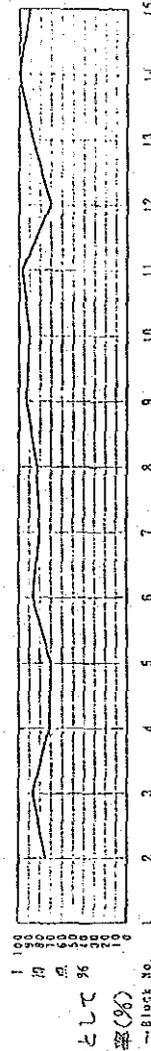
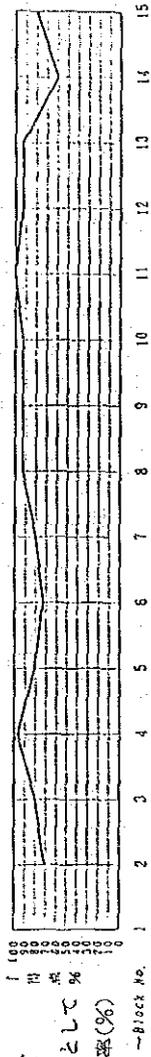
クイズ

3 票を1Blockとして
まとめた得点率(%)

聴解

クイズ

3 票を1Blockとして
まとめた得点率(%)



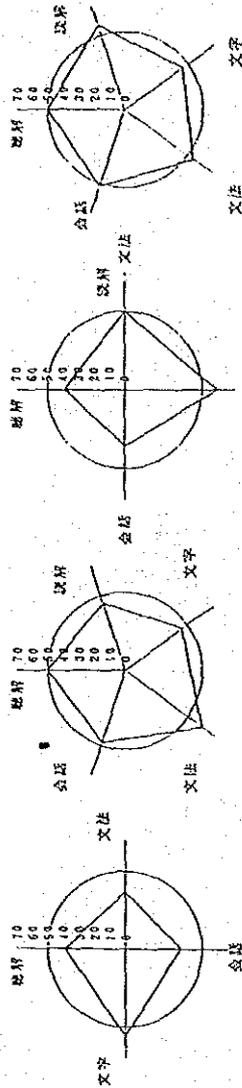
研修員個人別

成績推移記録

研修員名：B

習熟度
試験

グループ内偏差値



分冊 1

分冊 2

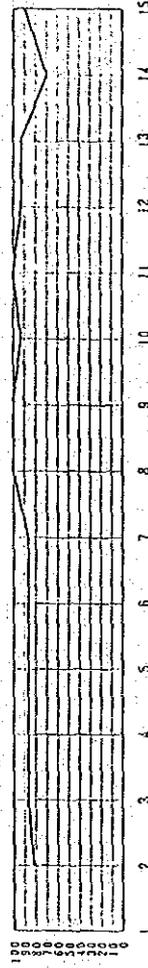
分冊 3

中級

漢字

カタカナ
クイズ
3課を1Blockとして
まとめた得点率(%)

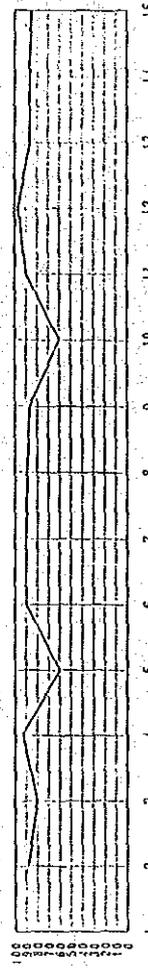
—Block No.



漢字

カタカナ
クイズ
3課を1Blockとして
まとめた得点率(%)

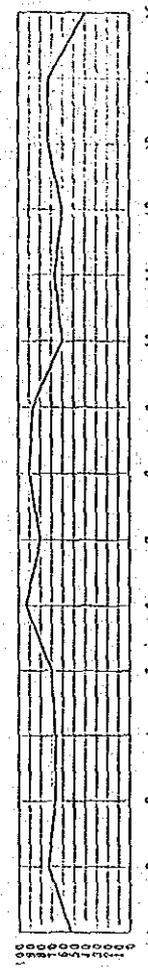
—Block No.



漢字

カタカナ
クイズ
3課を1Blockとして
まとめた得点率(%)

—Block No.



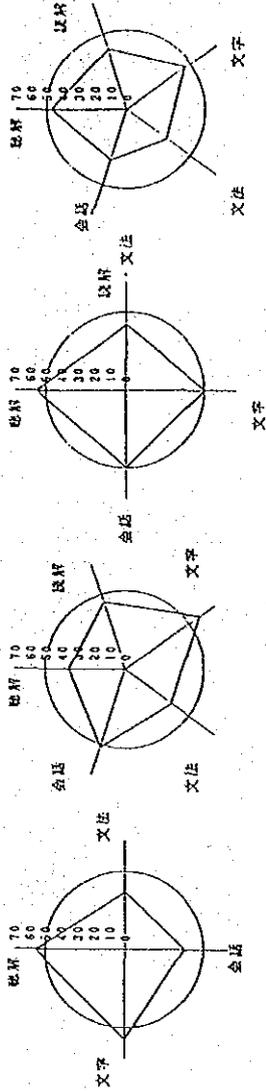
研修員個人別

成績推移記録

研修員名：C

習熟度
試験

グループ内順位値



分冊 1

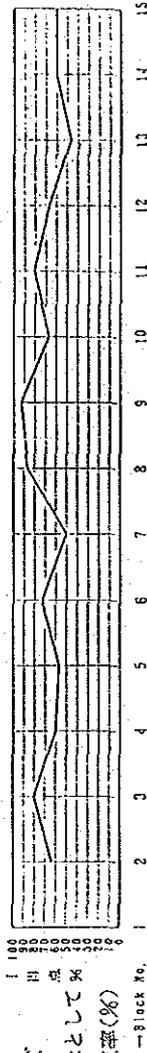
分冊 2

分冊 3

中巻

文型クイズ

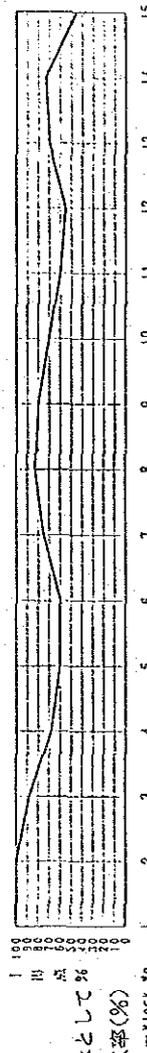
3課を1Blockとして%
まとめた得点率(%)



漢字

カタカナ
クイズ

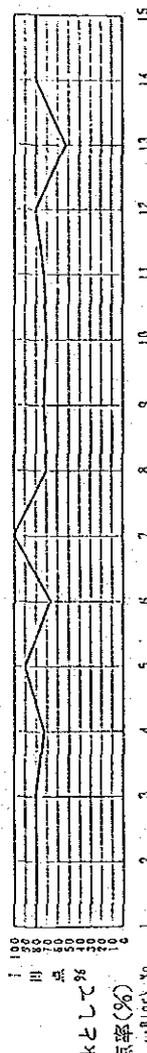
3課を1Blockとして%
まとめた得点率(%)



聴解

クイズ

3課を1Blockとして%
まとめた得点率(%)

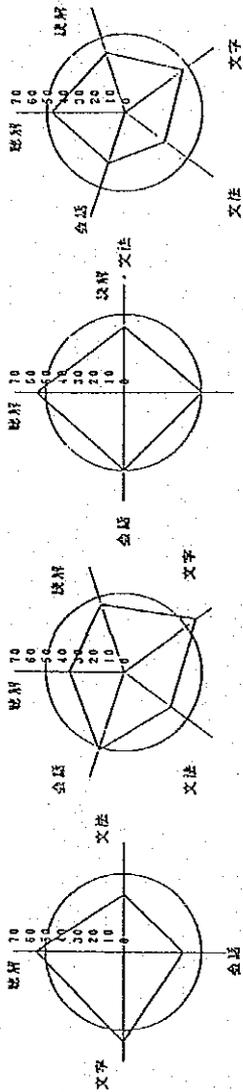


研修員個人別

成績推移記録

研修員名：D

習熟度
試験



グループ内偏差値

中級

分冊 3

分冊 2

分冊 1

漢字

カタカナ
クイズ

漢字

カタカナ
クイズ

聴解

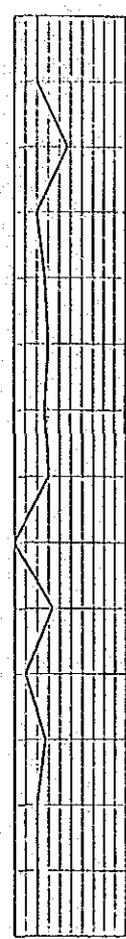
カタカナ
クイズ



—Block No. 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15



—Block No. 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15



—Block No. 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15

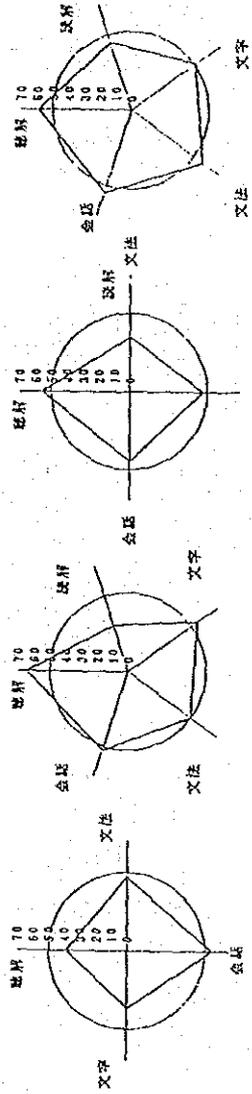
研修員個人別

成績推移記録

研修員名：E

習熟度
試験

グループ内偏差値



分冊1

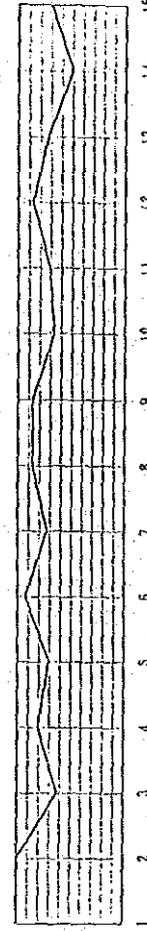
分冊2

分冊3

eP 級

文型クイズ

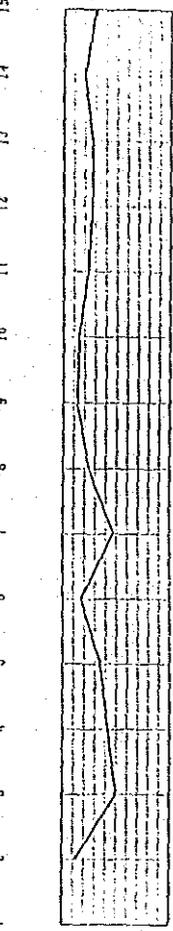
3 課を1Blockとして
まとめた得点率(%)



漢字

カタカナ
クイズ

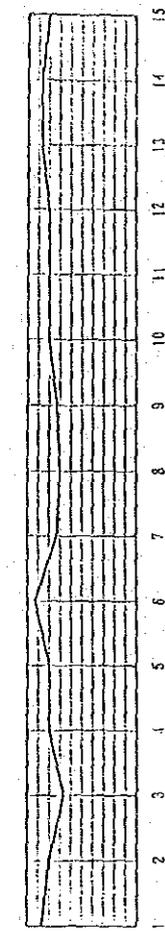
3 課を1Blockとして
まとめた得点率(%)



聴解

クイズ

3 課を1Blockとして
まとめた得点率(%)



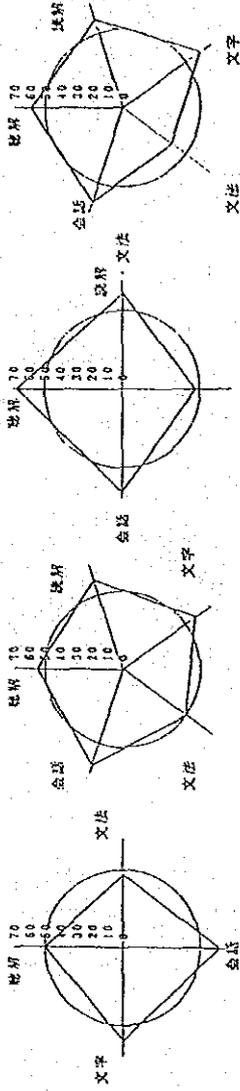
研修員個人別

成績推移記録

研修員名：F

習熟度
試験

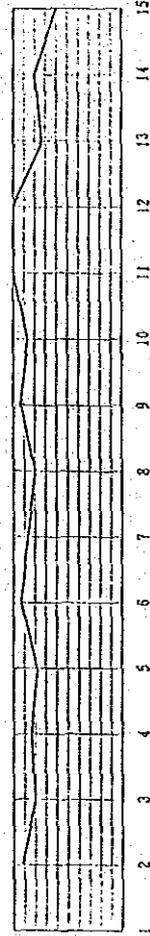
グループ内偏差値



中級

文型クイズ
3 課を 1Block として %
まとめた得点率 (%)

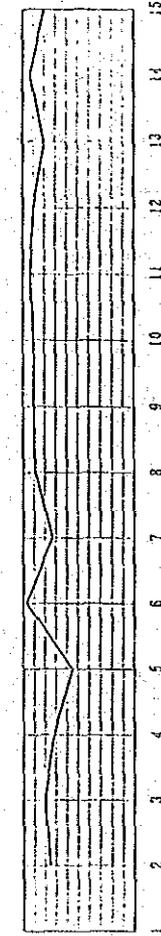
Block No.



漢字

カタカナ
クイズ
3 課を 1Block として %
まとめた得点率 (%)

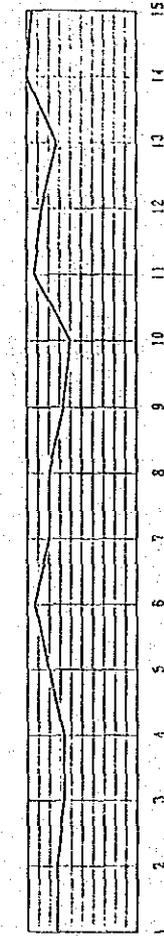
Block No.



聴解

クイズ
3 課を 1Block として %
まとめた得点率 (%)

Block No.



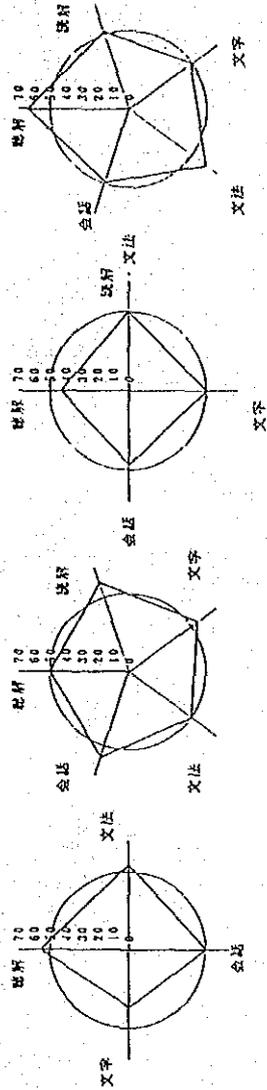
研修員個人別

成績推移記録

研修員名：G

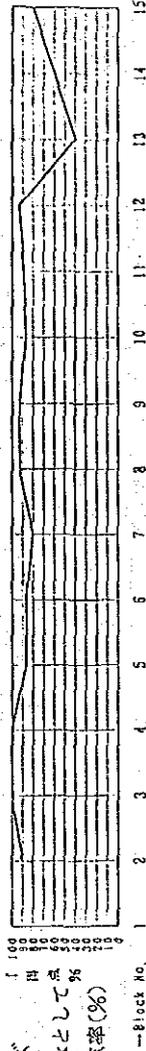
習熟度
試験

グループ内偏差値



文型クイズ

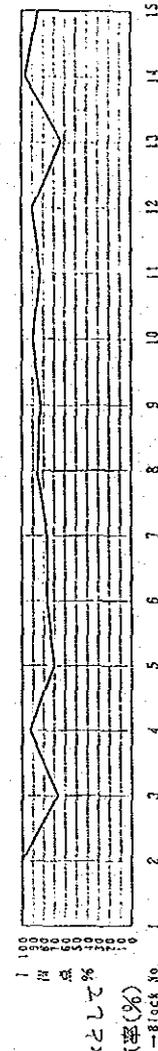
3課を1Blockとして
まとめた得点率(%)



漢字

カタカナ
クイズ

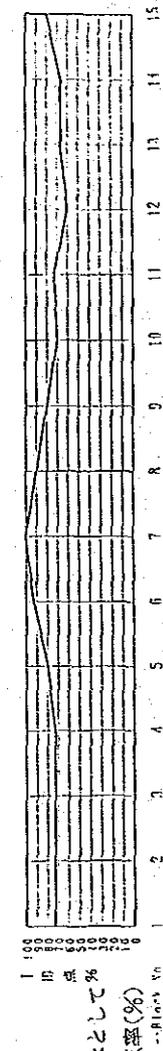
3課を1Blockとして
まとめた得点率(%)



聴解

クイズ

3課を1Blockとして
まとめた得点率(%)



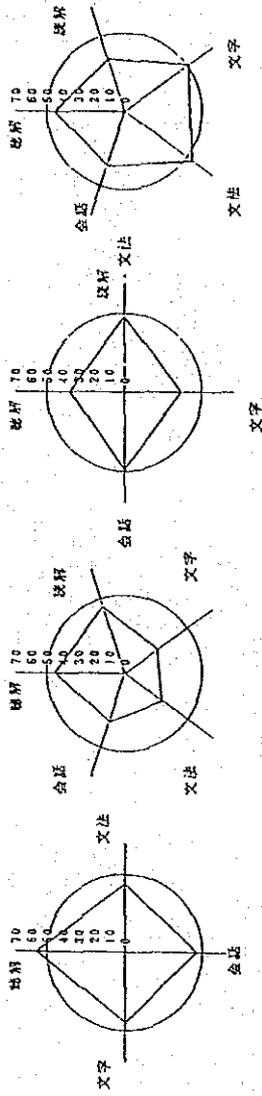
研修員個人別

成績推移記録

研修員名：五

習熟度
試験

グループ内偏差値



平均

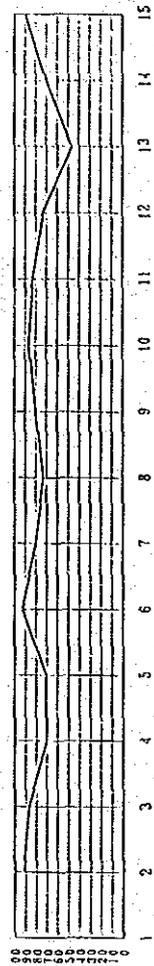
Block 1

Block 2

Block 3

漢字

カタカナ
クイズ
3課を1Blockとして
まとめた得点率(%)



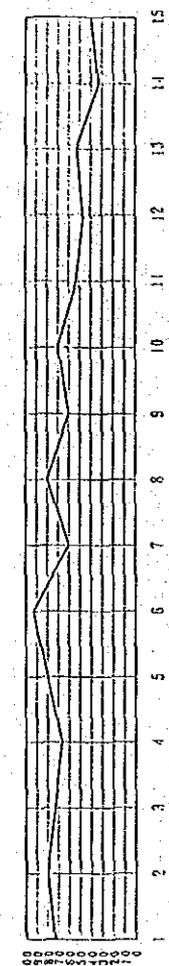
漢字

カタカナ
クイズ
3課を1Blockとして
まとめた得点率(%)



聴解

クイズ
3課を1Blockとして
まとめた得点率(%)



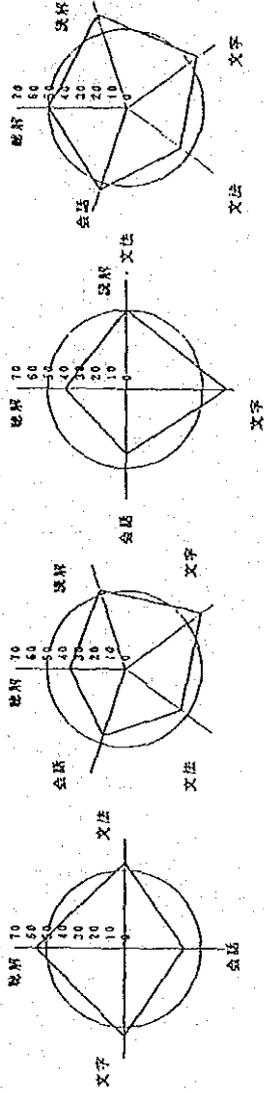
研修員個人別

成績推移記録

研修員名：I

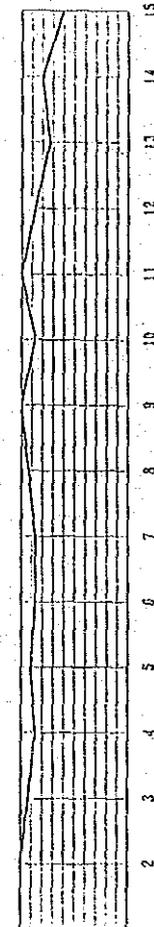
習熟度
試験

グループ内偏差値

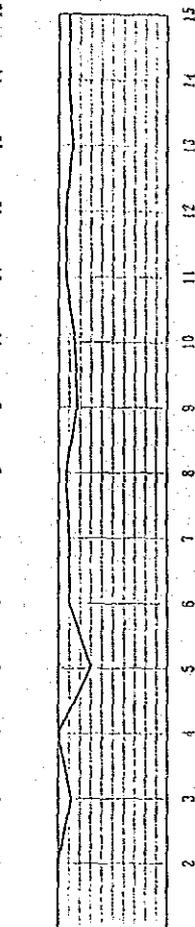


分冊 1 分冊 2 分冊 3 印刷数

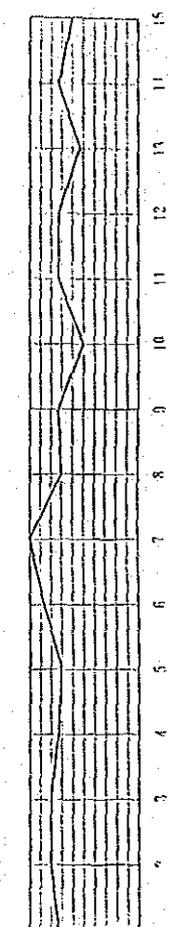
文型クイズ
3課を1Blockとして
まとめた得点率(%)



漢字
カタカナ
クイズ
3課を1Blockとして
まとめた得点率(%)



聴解
クイズ
3課を1Blockとして
まとめた得点率(%)



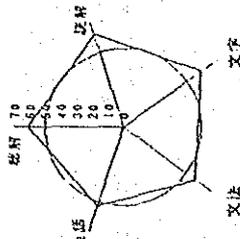
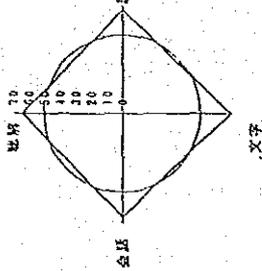
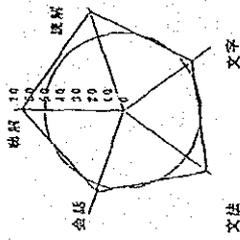
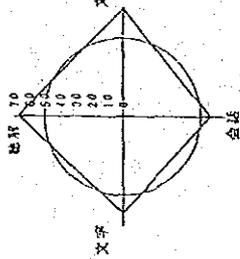
研修員個人別

成績推移記録

研修員名：J

習熟度
試験

グループ内偏差値



分冊 1

分冊 2

分冊 3

中級

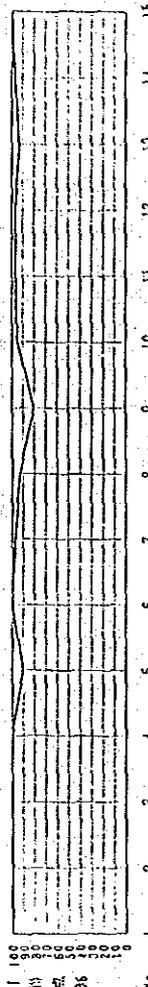
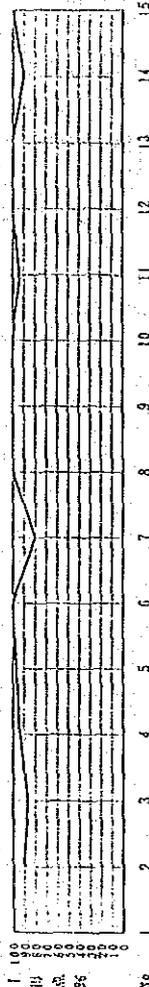
文型クイズ

3 課を 1Block として
まとめた得点率 (%)

漢字

カタカナ
クイズ

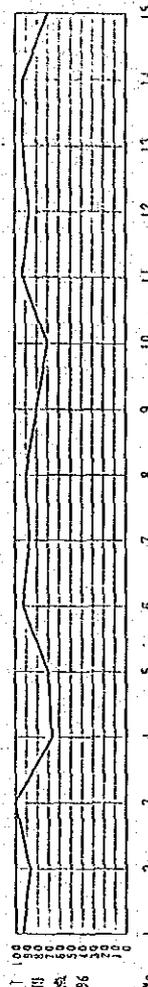
3 課を 1Block として
まとめた得点率 (%)



聴解

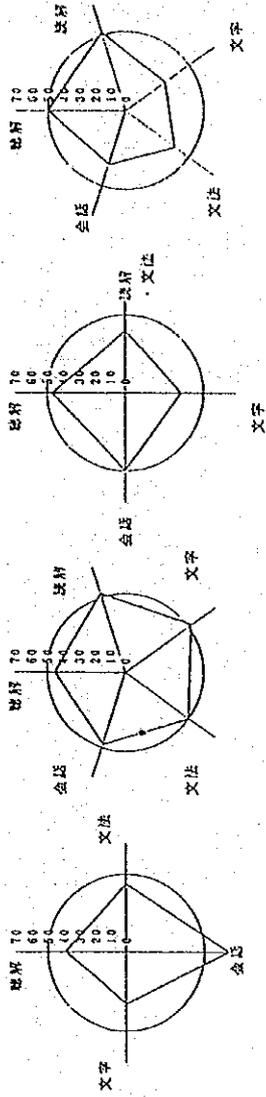
クイズ

3 課を 1Block として
まとめた得点率 (%)



習熟度
試験

グループ内偏差値



分冊 1

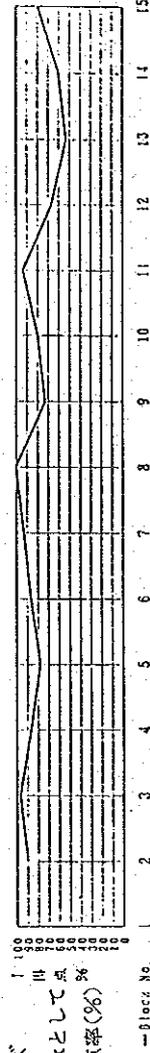
分冊 2

分冊 3

平均値

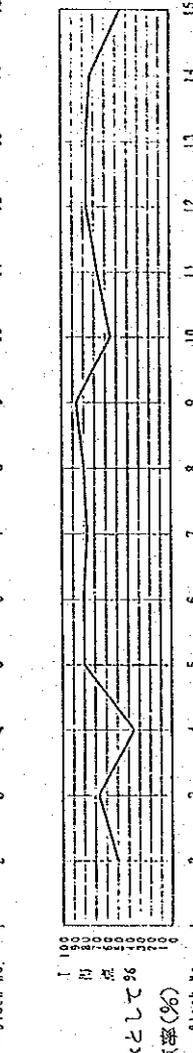
文型クイズ

3 課を 1Block として
まとめた得点率(%)



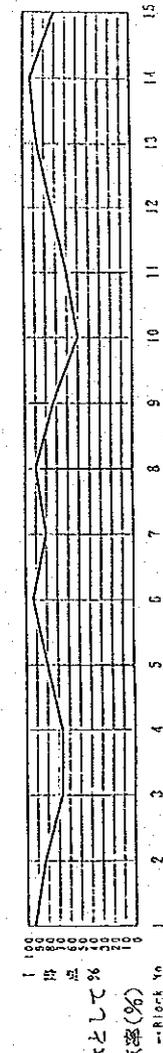
漢字

カタカナ
クイズ
3 課を 1Block として
まとめた得点率(%)



聴解

クイズ
3 課を 1Block として
まとめた得点率(%)



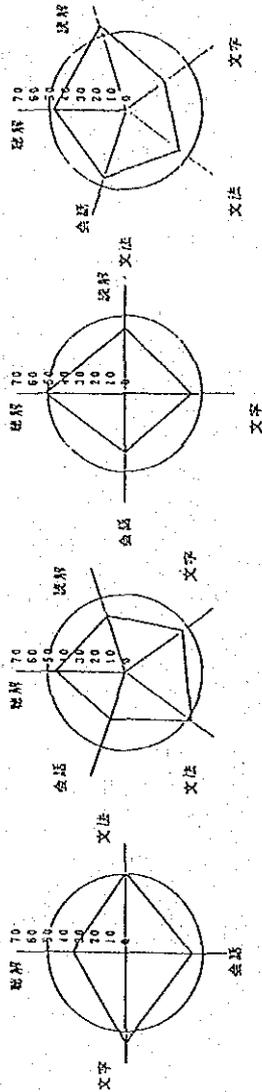
研修員個人別

成績推移記録

研修員名：I

習熟度
試験

グループ内偏差値



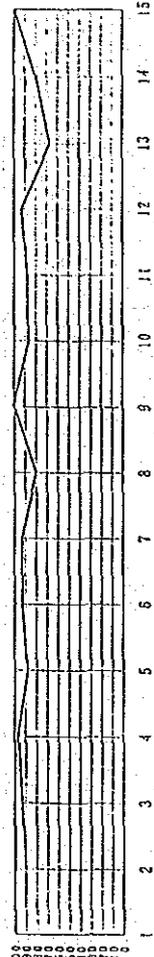
分冊 1

分冊 2

分冊 3

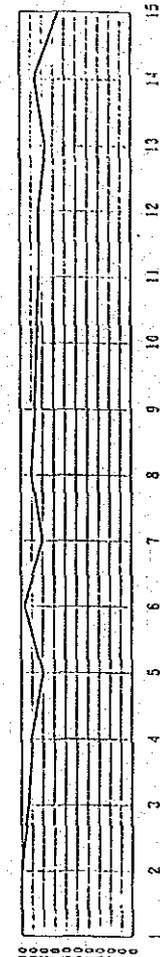
eip 校

文型クイズ
3課を1Blockとして
まとめた得点率(%)



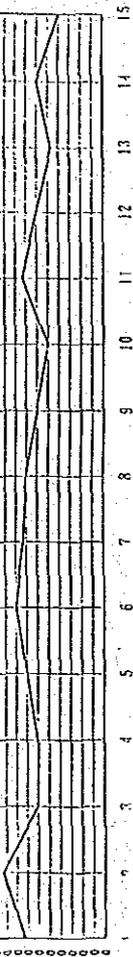
漢字

カタカナ
クイズ
3課を1Blockとして
まとめた得点率(%)



聴解

クイズ
3課を1Blockとして
まとめた得点率(%)



5. 問題点および研修成果総評

今回の日本語専修コースにおいて問題となった点、今後解決していかなければならない点をあげると次下の通りとなる。

今回のコースは試験的に研修期間を2ヶ月延長し、8ヶ月(約850時間)となった。この背景としては次の様な理由があげられる。一つは本コースの設置目的からのものである。本コースは、事業団による技術移転・技術協力事業を円滑に進めるため、一般的日本語及び各技術分野の日本語・日本人・日本文化を熟知した人材の養成を目的としている。しかし、従来初級から6ヶ月の研修のみでこの目的に到達するのは、きわめて困難であり、研修期間の延長が望まれていた。無論、8ヶ月が目的に到達できる十分な期間である訳ではないが、漸次延長させていく上での過程的措置と考えることができる。もう一つの背景は、6ヶ月という期間が事業団の編纂したテキストを用いた日本語学習において完結性に欠けるという当センター教育現場の声であった。事業団テキストは一つの分冊を100時間(=約1ヶ月)で学習し、初級3分冊を3ヶ月・中級3分冊も3ヶ月で修了するというのが基本的な考えであった。しかし、当センターの過去の日本語研修では、この時間配分ではカリキュラムの消化が非常に困難であり、初級3分冊修了までに4ヶ月弱を必要としてきた。日本語専修コースの場合、日本語の学習が本研修であり、漢字の学習を不可欠なものとして他コースよりも体系的に導入している点、またコース設置の目標に沿ってほぼ2週に一度、文化紹介などの野外研修を取り入れている点、さらに6ヶ月の期間中に研修旅行で少なくとも2週間が費やされる点などがその原因として考えられる。実質授業時間数だけで数えても、300時間で3分冊を学習し終えるのは、語彙や文型の定着を確認せず、カリキュラム消化型の授業にでもしないかぎり非常に難しい。逆に言えば、6ヶ月の研修で、事実として、初級に4ヶ月弱必要なものであり、残る2ヶ月強で中級内容の学習・ファイナルレポート・修了制作をこなさなければならないのが実情であった。

今回の期間延長で上記の後者については、好ましい結果となった。中級に相当の時間を割くことができたため、従来カリキュラムの消化に迫られていたものに、合目的性のある学習や、創作性の高い内容を加えることができた。8ヶ月のコースとしてはかなり成功したと言ってよい。しかし、現状の当センターの日本語専修コースとして8ヶ月

コースが最適かどうかについては、いくつかの点で疑問がある。まず、第一に8ヶ月という長期間、日本語について白紙の状態から始める研修員を指導し続けられるかという問題である。今回の研修員は比較的語学能力が高く所謂「おちこぼれ」は出なかったが、これは珍しい例と考えた方がよい。初級コースの場合、語学センスの低い者が1クラスに1名以上含まれるのが常である。そうした研修員が8ヶ月という長期にわたって研修を受け続けることは、始めのうち、動機の高い間は心理的に耐えられるだろうが、長くなる程問題が出てこよう。これは本人ひとりの問題に留まらず、コース全体に悪影響を与えることは目に見えている。第二に、今回の様な比較的「粒ぞろい」の研修員であっても、「研修総評」で11名中7名が研修期間が「長すぎる」あるいは「長い」と感じており、8ヶ月コースを運営する為には学習動機を維持する上での工夫が必要と思われる。どのコースも初級修了までは来日当初の動機を何とか維持できる研修員が多いが、シラバス形態の変わる中級に入ると、学習意欲を維持させるのに講師側が非常に苦勞する。今回の合目的学習も、ひとつの目的は動機の維持であった。今後は初級修了段階で、能力別編成にする、あるいは成績優秀者に限って中級の継続研修を認めるなどといった措置が必要になってくるとと思われる。

研修成果総評

注1：下記のグラフは研修員のアンケートをもとに作成

注2：（ ）内の数字は延べ回答数

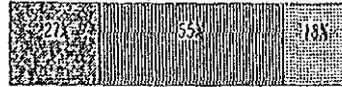
I コース総評

a. コース総合的評価



◎	非常に良かった	(3)
○	良かった	(5)
◐	良かった方である	(3)
◑	まずかった	(0)
●	非常にまずかった	(0)

b. コース運営の明確さ・連絡調整



◎	とても良かった	(3)
○	良かった	(6)
◐	良かった方である	(2)
◑	悪かった	(0)
●	とても悪かった	(0)

c. 研修期間



◎	長過ぎた	(2)
○	長かった	(5)
◐	適当	(4)
◑	短かった	(0)
●	短か過ぎた	(0)

d. 見学及び研修旅行等の日本学習への貢献度



◎	とても良かった	(4)
○	良かった	(5)
◐	良かった方である	(2)
◑	悪かった	(0)
●	とても悪かった	(0)

e. 見学及び研修旅行等の計画性

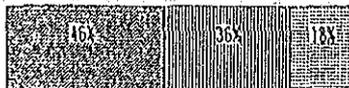


◎	非常に良い計画だった	(4)
○	良い計画だった	(6)
◐	良い方であった	(1)
◑	まずかった	(0)
●	非常にまずかった	(0)

II 教科書及び補助教材

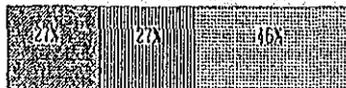
A. 教科書

a. 初級



- 非常に役に立った (5)
- 役に立った (4)
- 役に立った方である (2)
- 役に立たなかった (0)
- 全然役に立たなかった (0)

b. 中級



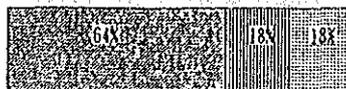
- 非常に役に立った (3)
- 役に立った (3)
- 役に立った方である (5)
- 役に立たなかった (0)
- 全然役に立たなかった (0)

c. (自然) 科学

このコースには該当しない。

- 非常に役に立った ()
- 役に立った ()
- 役に立った方である ()
- 役に立たなかった ()
- 全然役に立たなかった ()

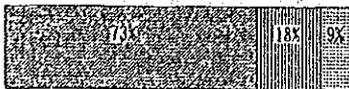
d. Grammar Note



- 非常に役に立った (7)
- 役に立った (2)
- 役に立った方である (2)
- 役に立たなかった (0)
- 全然役に立たなかった (0)

B. 補助教材

a. 辞書類 (和英辞典, 英和辞典等)



- 非常に役に立った (8)
- 役に立った (2)
- 役に立った方である (1)
- 役に立たなかった (0)
- 全然役に立たなかった (0)

b. 漢字辞典



- 非常に役に立った (7)
- 役に立った (3)
- 役に立った方である (2)
- 役に立たなかった (0)
- 全然役に立たなかった (0)

c. ひらがな練習帳



- 非常に役に立った (5)
- 役に立った (4)
- 役に立った方である (1)
- 役に立たなかった (1)
- 全然役に立たなかった (0)

III L. L. 教室とテスト

a. L. L. 教室の効果度



- 非常に効果的であった。(3)
- ◐ 効果的であった。(6)
- ◑ 効果的なほうであった。(2)
- 効果的ではなかった。(0)
- 全然効果的ではなかった。(0)

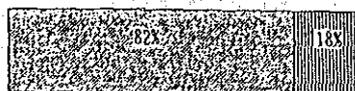
b. テスト題の学習への貢献度



- 非常に役に立った。(7)
- ◐ 役に立った。(3)
- ◑ 役に立った方である。(1)
- 役に立たなかった。(0)
- 全然役に立たなかった。(0)

IV 講義及び講師

1. 講義の準備程度



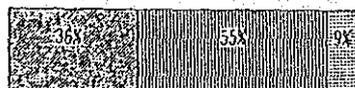
- 非常に良く準備されていた。(9)
- ◐ 良く準備されていた。(2)
- ◑ 準備されていた方である。(0)
- 準備されていなかった。(0)
- 全然準備されていなかった。(0)

2. 講師達による日本語学習への貢献度



- 非常に良く指導してくれた。(5)
- ◐ 良く指導してくれた。(6)
- ◑ 指導してくれた方である。(0)
- 指導してくれなかった。(0)
- 全然指導してくれなかった。(0)

3. 講師達による日本語学習における動機づけ



- 非常に良く指導してくれた。(4)
- ◐ 良く指導してくれた。(6)
- ◑ 指導してくれた方である。(1)
- 指導してくれなかった。(0)
- 全然指導してくれなかった。(0)

4. 講師達による必要時の十分な手助け



- 非常に良く手助けしてくれた。(6)
- ◐ 良く手助けしてくれた。(5)
- ◑ 手助けしてくれた方である。(0)
- 手助けしてくれなかった。(0)
- 全然手助けしてくれなかった。(0)

5. 講師達による十分な作文指導



- 非常に勉強になった。(5)
- ◐ 良く勉強になった。(6)
- ◑ 勉強になった方である。(0)
- 勉強にならなかった。(0)

6. 日本語専修コース(A)実施報告

上記コースの日本語研修は、昭和63年4月18日より昭和63年9月30日まで、沖縄県語学センターが韓国国際協力サービス・センターより委託され、沖縄国際センターにおいて実施された。以下にその実施状況を報告する。

報 告 者 : バントロイヤー朋子

西部 仁朗

祖慶 嘉子

金城 尚美

久保田真弓

研 修 コ ー ス 名 : 第7回 日本語専修コース(A)

研 修 期 間 : 昭和63年4月18日～昭和63年9月30日

授 業 時 間 数 : 一週間25時間 6ヶ月24週 565時間

研 修 員 名 :

No	名前	年齢	国 名	職 業
1	A	20	インドネシア	Staff of the Administration Division CEVEST 労働省
2	B	34	インドネシア	Staff of Sub Division for Bilateral cooperation, Bureau of Public Relation CEVEST 労働省
3	C	53	インドネシア	医師
4	D	31	セネガル	日・セ訓練センターC/P
5	E	27	タイ	Officer, P.C.A.Eastern Institute for Skill Development. 労働省
6	F	35	タイ	Head of Mechanical Engineering Laboratory, Institute of Technology & Vocational Education
7	J	31	トルコ	アンカラ工業専門高校機械科 教師

(1) 実施概要

当日本語専修コースは、事業団の技術協力・技術移転事業において、相手国側に、一般的な日本語各技術分野についての日本語及び日本人・日本文化を熟知した人材を養成することによって、事業を円滑に進めることを目的として設置されている。

本コースも7回目を数え、今回は第6回目の日本語専修(B)コースで試行的に導入された漢字学習CALや標準的評価法等を当センター日本語専修コースの骨組みとすべく位置づけをし、更に、過去の経験を踏まえ様々なコース運営上の改良がなされた。従来のタスク・リスニングによる宿題の研磨に加えて今回は初級から中級への円滑な移行を目指し、第一課から各課毎の読解練習問題及び作文練習問題等も作成され、宿題および練習問題としてテスト使用がなされた。

また、今回の研修員は個人差はあるものの動機・能力も平均的で、また、性格的にも、皆、協調的で、チーム・ワークは良く、研修上、生活上の大きな問題も特になく、コース運営が比較的円滑に進んだと思われる。8ヶ月コースに延長となった第6回日本語専修(B)コースとコース運営、及び目標達成度、研修期間の妥当性等の点で良い比較の対象となり、次の日本語専修コース運営の大きな参考になりうるものである。これらの点について以下のとおり報告する。

研修運営

8ヶ月コースの日本語専修(B)コースに比べて、本コースは時間的制約が大きく、研修目的に到達するのはきわめて困難であった。一応600時間が研修時間数となっているが、実質565時間という時間で初級から中級の到達目標達成にはやはり少なくとも8ヶ月、理想をいえば1年という研修期間が適当である。

初級修了までに、分冊3までの学習に課外活動・研修旅行・行事等を含めると約4ヶ月弱の時間を要し、残り約1ヶ月強で中級内容の学習、職業訓練校への体験入学、修了制作、ファイナル・レポート、スピーチ・コンテストという項目を消化していかなければならないため完結した内容にするのが困難であり、ゆとりのあるシラバス設定を目指していたにもかかわらず、研修員及び講師双方に大きな荷重がかかった。

研修員の能力について

研修員間に当然のことながら能力及び動機の強弱という点では差異が見られたが、悪影響が生じる程ではなく、比較的全体の水準は高かった。因みに、前回のコースと

同一内容の試験（聴解、読解、文法、漢字、会話の5分野）を分冊1、2、3で実施したが、分冊1、2とも高得点で、分冊3で多少落ちたものの、これ以上習熟度の高いコースは、後にも先にも出ないであろうと言われた前回のコースの平均点をはるかに上回った。中級に入ってから約1ヶ月の中級学習期間という時間の中で伸び悩みがみられたがセネガルのケベとインドネシアのエディ、タイのコマカイなどは確実な伸びを示した。

初級の伸びが究めていい理由は、今回講じた教務上の措置が効を奏した側面もあろうが、やはり動機が非常に高く、各研修員が口では「きつい」と言いながらも、真面目に着実に基礎能力を身に付けていったことによるところが大きい。中級での伸びがやはり今少しというのは約100時間という極限の時間内での中級学習に無理があり、研修修了時の諸提出物、行事、演習等の実施等を教科書の課の内容に併せて日本語学習の一環としたが、多忙であったという事にもよろう。

(2) 研修目的と基本カリキュラム

ア. 研修目的

事業団による技術研修は、英語を媒介語として行われているが、専門家などの日本人担当者とのコミュニケーションや、技術書の多くが日本語で記されている点等を考慮すると、日本語に習熟した人材の養成が重要である。

また、日本人や日本の社会・文化等を理解した人材はわが国の協力プロジェクトを円滑に進める上でも大きな役割を果たすことが期待される。

かかる人材を養成するため、主にプロジェクト・専門家のカウンターパートの研修員を対象に6ヶ月の日本語集中研修を実施した。

① 初級・基本カリキュラム

S63年4月18日～S63年8月9日

(a) 指導方針：目標と内容

基本的には、感情移入を起こさせるよう Oral-Aural Approach を用い、その弱点を補う意味でも SSP, Communicative Approach, Immersion Approach、その他の教授法を適宜補足し、言語機能の理解を深め、学習効果を高めて行く。

「技術研修のための日本語分冊1～3」を主教材として語彙と初級文型の定

着を図り、実際場面での運用能力の習得を目標とし、四技能を総合的に習得させていく。

下記の各項目の指針が緊密に関連作用して、全体の指導方針を形成することとなる。

1) 表記指導

ひらがな——インタビューの時点でかな入門を与え、開講から2週間で定着を図る。

カタカナ——出現頻度にバラツキがあるので、ひらがな導入直後に認識を第一に定着を図る。

漢字——学習心理上、早い時期の方が困難が少なく習得できるという理由で、開講2週目にCALでの漢字導入を開始する。漢字学習の目的は文字によって必要な情報を得ると言う事にあるので、その重要性を認識させ、出来るだけ語彙といっしょに指導する。又、自習をするくせをつけるよう動機づけをしていく。

2) 発音指導

基本的には教科書にそって授業を行いながら、適宜指導する。この段階では速度とイントネーションに特に注意する。

3) 聴解指導

教室での練習の第一段階では徹底して文字を介さず、内容理解に務めさせ、その後で文字を見て確認していく。LLではアナライザー・クイズ、宿題としてはタスクリスニングを通して、未知の語彙を含んだ日常言語状況に対応出来る能力を高めていくよう指導する。

4) 対話指導

暗唱用OHPシート等を利用して模倣から創造的対話練習まで一貫した積み上げで、対話基礎能力を築かせる。問答練習でも対話練習に繋がるように、又「Hot Potatoes」を投げられるよう教科書以外のものも用意し、発話も養って行った。

5) 読解練習

中級で、重要な情報をピック・アップできるよう、文全体の大意の把握を目指すので、初級の段階ではそれに繋げるような指導を目指す。タスク・リーディングを各課毎に宿題として与え、翌日教室で10分程度の時間で答合わせをしていく方法を採用する。文字指導とも結びつけていきながら、未知語処理の練習も少しづつ始めて行くこととした。

6) 文型指導

文法練習の宿題を毎課ごとに与え、各課毎にクイズを課す。教室では既習の実例を駆使して、帰納的に把握させていくようにし、又、短文ばかりに慣れてしまい、長文の文脈把握に困難を来す弊害を減らしていくこととした。

7) 作文指導

クローズ・テスト形式の練習問題等を通して、各文型を用いた複文程度の練習を教室で行うこととする。又、研修レポート等で日記形式のパラグラフを作成させ、長文への準備を行う。

8) 語彙指導

出来るだけ既習の実文の中で導入して行き、除々に、パラフレイズイングが出来るように積み重ねていく。

(b) 各課の進行

初級段階では、各課の進行は基本的に次の表の順で行われる。

一課につき3コマを基準としているが、課によっては内容の難易度によって2コマになる場合もある。

1コマ目	A	B	B'
	復習クイズ・新語彙	文型導入・ドリル1	文型導入・ドリル1
2コマ目	C	D'	D'
	LL	文型導入・ドリル2	文型導入・ドリル2
3コマ目	E	E'	F
	会 話	応用練習・読解/作文練習	表 記

A: 復習クイズ

文法クイズ……………第5課以降、前日修了した課の文法クイズを実施する。

漢字カタカナ・クイズ……………各課ごとに前日修了した漢字の認識と表記、及びカタカナ表記のクイズを実施する。

アナライザー・クイズ……………前日終了した課の聴解のクイズをテープを用いて教室で実施する。

注：クイズ類は原則として授業を行った講師が採点しコース・リーダーに渡す。

新しい語彙

新しい語彙は復習もかねて、既習の文型の中で導入していく。

B & B': ドリル1

原則としてテキストは見せずに、絵教材・実具・ビデオ・動作・文型OHP等を駆使して口頭練習を行う。その際、媒介言語に依存しない概念を形成するべく、帰納的に把握させる方向づけをしていく。

C: LL授業

LL教室で、前課のアナライザー・クイズの復習と、ドリル1のLLによる練習を行う。極力口頭のみで練習するよう指導する。

D & D': ドリル2

ドリル2の語彙と文型練習。場面に依存した機能的応用練習が主なので、問答形式の練習でも対話練習に繋がるよう発展的な指導を行う。

E & E': 会話／応用練習・読解・作文練習

テキストの会話文の読みと暗唱の練習。ロール・プレイとそのビデオ・フィードバックを多用し、暗唱用のOHPも利用する。

テキストの会話文を基にドラマタイゼーション等で応用自由会話を発展させる。又、10分程読解練習シート・作文練習シートを利用して、両技能を積み上げて行く。

F: 表記

各課の内容に併せて精選した漢字を導入する。CALを効率よく利用していく。構成要素の意味や字源等を出来るだけ、語彙と一緒に導入して漢字に

興味を持たせ、繰り返し書いたり、教科書を読む自習の習慣を早くからつけるよう指導する。漢字ワーク・シートを宿題として与える。

(c) 教 材

本コースの研修においては、以下に列举する教材を用いた。

〔主教材〕

技術研修のための日本語（初級）分冊 1（JICA）

技術研修のための日本語（初級）分冊 2（JICA）

技術研修のための日本語（初級）分冊 3（JICA）

技術研修のための日本語（中級）分冊 4（JICA）

技術研修のための日本語（中級）分冊 5（JICA）

〔副教材〕

技術研修のための日本語・工業技術分野（JICA）

〔補助教材〕

Grammar Notes（JICA）

かな入門（国際交流基金）

CAL対応漢字ワークシート（初級分冊 1～3）（講師作成）

タスク・リスニング課題集（初級分冊 1～3）（講師作成）

アナライザー・クイズ集（初級分冊 1～3）（講師作成）

LLオーディオ・テープ（JICA編）（講師作成）

VTR教材（国立国語研究所編）／（JICA編）

OHP文型指導教材（講師作成）

スチール・ビデオ教材（講師作成）

絵教材（海外技術者研修協会編）／（JICA編）／（講師作成）

分冊 4 聴解ワーク・シート（講師作成）

中級演習用ハンド・アウト（講師作成）

職業訓練分野別専門用語集（JICA編）

〔クイズ等〕

かなクイズ（講師作成）

文法筆記クイズ（講師作成）

漢字カタカナ・クイズ	(講師作成)
習熟度試験(分冊別:読解・文法・会話・文字)	(講師作成)
読解練習問題	(講師作成)
作文練習問題	(講師作成)

[参考書籍]

英和・和英辞典(洋販刊)
外国人のための漢字辞典(文化庁刊)

[貸与機器等]

テープレコーダー(L1機能付き)
トーキング・マシーン(補修用)
テレビ
ワープロ(辞典作成用)

(d) その他の特記事項

野外研修と研修旅行

日本語学習への動機づけと現実場面での言語運用能力の向上、及び日本人と日本の文化・社会の理解のため、学習内容に即した野外研修を多く取り入れる。その際、課題作業を必ず伴わせる。研修の中期に関西への、後期に東京への研修旅行を行い、日本語能力の実際場面での活用と、日本の社会・文化・歴史等に対する理解を深める。

5課毎の復習

テキストの5課ごとに口頭作文を中心とした復習『文作くん』を行う。

宿題

タスク・リスニング (各課終了ごとに)
句型練習の宿題 (同)
読解練習の宿題 (同)

ホーム・ルーム

毎週金曜の午後(金曜が休日の場合は月曜の朝)、10分程度のホーム・ルームを行い、その週のスケジュールの確認等をし、問題があれば話合う。コース・リーダー・その時間の担当講師は必ず出席する。

インタビュー

月曜から金曜の午後4時30分より15分程度、研修員を個人別にインタビューし、学習上、又生活上の困難点や問題点等を話あい、今後の日本語学習の効果が高まるよう方向づけをして行く。専任は必ず出席し、又他の講師も時間の許す限り出席する。

第一回目のインタビューは分冊1終了後開始、第二回目のインタビューは分冊4開始後1週間目に行なう事とする。

週間スケジュール

翌週のスケジュールは、担任が金曜日に研修員に配布しホーム・ルームで確認する。

② 昭和63年度日本語専修コース(A) 中級・基本カリキュラム

8月23日(火)から9月30日(金)までの中級日本語学習期間には、演習を行動目標の照準にし、それと関連性の高い課で、また、帰国後のニーズ性の最も高い課をテキストの分冊4、5から選出し、授業を実施する。なお、その際の教授法としては、オーディオ・リンガル・メソッドとコミュニケーション・アプローチの折衷とする。

(a) 概要

学習期間

昭和63年8月23日(火)～9月30日(金)

授業時間数

120時間(28日、6週間)

担当講師

ヴァントロイヤー朋子(担任) 西部仁朗 祖慶嘉子 久保田真弓

使用教材

主教材

技術研修のための日本語(分冊4&5)

副教材

技術研修のための日本語・工業技術分野

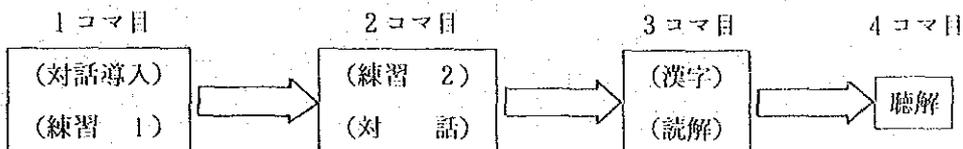
補助教材

各課の聴解シート

各課の対話シート

1) 分冊 4 & 5 ・各課の進行

中級レベルでは、各課の進行は基本的に次の表の順で行われる。1課につき3コマ半の時間数を基準としているが、課の難易度によっては4コマになる課もある。4コマ目は通常時間数の半分の時間数なので、そのコマで新しい課に入った場合は、下記の組み合わせは一つずつづれる。



〔対話導入〕 各課の対話部分のテープを聞かせて、大意を把握させ、不明な語句を話し合い、又、トピックについて意見をのべさせる。この段階ではトップ・タウン的なアプローチなので、全体像をつかませ、それから得た情報で議論なり意見を述べさせることを主軸とする。

〔練習 1〕 各課の練習の部分の口頭ドリルを行う。練習部における新出語彙も同時に導入して行くこととする。

〔練習 2〕 練習1で終わらなかった箇所と各課の練習の部分に含まれる文型・語彙を用いた短い作文の練習も行う。各課の内容に沿ったテーマでパラグラフ分の作文練習も時間的なゆとりがあれば行っていく。

〔対話〕 対話部分の精読。語彙・文型の確認。出来れば暗唱させて、ロール・プレイを行い、ビデオ・フィードバックをする。暗唱用OHPシートや練習用クローズシートを使用する。

〔漢字〕 各課の読解の内容に沿った漢字の練習

〔読解〕 各課の読解部分の精読。内容把握、新出語彙の導入と、既習語彙・文型漢字の確認とトピックについて意見を述べさせる。

〔聴解〕 聴解テープを聞き大意の確認をした後練習用シートの3をクイズとして実施する。なお、前日聴解部分テープと聞取り練習用シートを渡して練習させておく(シート1&2)。

2) 特記事項

副教材

技術研修のための工業分野別

沖縄南技能開発センターへの体験入学にそなえての準備作業の一環として、テキストと並行して使用する。工業分野での基礎語彙や、実技で使われる表現などを導入し、入学の準備をする。詳細はシラバス参照。

演習準備

演習準備を演習の前の時間に行う。見学先での質問などの準備をしたり、専門分野の語彙や予備知識の導入を行う。演習の詳細はシラバス参照。

ニュースの日本語

分冊3後半から開始した研修員によるニュース概要の発表を継続する。毎週月曜日の午前の授業を前週のニュースのまとめの時間とする。語彙、表現の整理を目的とし、「ニュースで学ぶ日本語」副教材として使用する。ただし、前週のニュースの内容に合致するものがある場合にのみ併用する。使用する場合、前週の金曜日の午後、その課のテープを配布しておく。「ニュースで学ぶ日本語」の聞き取り練習シートをクイズとして使用する可能性もある。

尚ニュース発表のためのニュースは新しいニュースに限り、研修員はテレビ、ラジオ、新聞などから材料を選び、発表する。

週間クイズ

前週学習事項のまとめ及び確認の意味で、週一回クイズを行う。内容は初級レベルで一環して実施してきた文型クイズ、漢字クイズ等の継続的なもので、より充実した内容で、発展性をもったものになる。(演習がある場合には、演習内容も加味される。)

ホーム・ルーム

金曜日に15分程度、次の週のスケジュールの確認や伝達事項や留意点などを伝える。

3) 週間スケジュール概要

(演習内容と各課の難易度によって変動することがある)。

曜	内 容	講師	内 容	講師	備 考
月	週間クイズ ニュースまとめ ニュース日本語	金城	ニュース発表 第X課 対話導入 練習 1	久保田	
火	第X課 練習 2 対話	久保田	ニュース発表 第X課 漢字 読解	祖慶	第X課 聴解テープの配布
水	第X課 解クイズ	册子	ニュース発表 第Y課 練習 練習 1 2	西郡	聴解クイズの採点・記録
木	第Y課 対話 漢字	金城	ニュース発表 第Y課 読解	册子	第Y課 聴解テープの配布
金	第Y課 聴解クイズ 演習準備 ホーム・ルーム	册子	演習	祖慶	聴解クイズの採点・記録 聴解テープの配布 週間クイズ作成 「ニュースで学ぶ日本語」 テープ配布

③ コース・シラバス (S63年度)

(a) コース名：日本語専修(A)コース

4月				5月				6月			
月	曜日	午前	午後	月	曜日	午前	午後	月	曜日	午前	午後
1	金			1	日			1	水	L-17	L-18
2	土			2	月			2	木	L-18	L-18&19
3	日			3	火	Constitution Day		3	金	L-19	L-19
4	月			4	水			4	土		
5	火			5	木	Children's Day		5	日		
6	水			6	金	L-7	L-7	6	月	L-20	L-20
7	木			7	土			7	火	L-20&復習	復習&旅行準備
8	金			8	日			8	水	石垣島 研修旅行	
9	土			9	月	L-7	L-8	9	木		
10	日			10	火	L-8	L-8	10	金	手紙&レポート	復習
11	月			11	水	L-9	L-9	11	土		
12	火			12	木	L-9	L-10	12	日		
13	水			13	金	L-10	L-10&復習	13	月	L-21	L-21
14	木			14	土			14	火	L-21&22	L-22
15	金			15	日			15	水	L-22	L-23
16	土	バス・ツアー (EXPO)		16	月	L-11	L-11	16	木	L-23	L-23
17	日			17	火	L-11	L-12	17	金	L-24	L-24
18	月	開講式	L-1 ひらがな	18	水	L-12	L-12	18	土		
19	火	L-1 ひらがな	L-2 ひらがな	19	木	L-13	L-13	19	日		
20	水	L-2 ひらがな	L-2 ひらがな	20	金	L-13	交流会	20	月	L-25	L-25
21	木	L-3 ひらがな	L-3 ひらがな	21	土			21	火	L-25	復習&L-26
22	金	L-3 カタカナ	サバイバルT	22	日			22	水	L-26	L-26
23	土			23	月	L-14	L-14 5	23	木	L-27	L-27
24	日			24	火	L-14&15	L-15	24	金	L-27	L-28
25	月	L-4 かな習熟度 テスト	L-4 ひ&カ文	25	水	L-15	復習	25	土		
26	火	L-4 ひ&カ文	L-5 &漢字導入	26	木	BOOK 1 テスト		26	日		
27	水	L-5	L-5	27	金	テストのKR情報	ビデオ制作	27	月	L-28	L-28
28	木	復習	L-6	28	土			28	火	L-28&29	L-29
29	金	L-6	L-6	29	日			29	水	L-29	L-30
30	土			30	月	L-16	L-16	30	木	L-30	L-30
				31	火	L-16&17	L-17				

7月

月	曜日	午前	午後
1	金	復習	復習
2	土		
3	日		
4	月	BOOK 2 テスト	
5	火	テストのKR情報	お茶会
6	水	L-31	L-31
7	木	L-31&32	L-32
8	金	L-32	旅行準備
9	土		
10	日		
11	月	関西研修旅行	
12	火		
13	水		
14	木		
15	金		
16	土		
17	日		
18	月	手紙&レポート	手紙&レポート
19	火	L-33	L-33
20	水	L-33&34	L-34
21	木	L-34	L-35
22	金	L-35	L-35&復習
23	土		
24	日		
25	月	L-36	L-36
26	火	L-36&37	L-37
27	水	L-37	L-38
28	木	L-38	L-38&39
29	金	L-39	L-39
30	土		
31	日		

8月

月	曜日	午前	午後
1	月	JICA創立記念日	
2	火	L-40	L-40
3	水	L-40	L-41
4	木	L-41	L-41&42
5	金	L-42	L-42
6	土		
7	日		
8	月	L-43	L-43
9	火	L-43&44	L-44
10	水	L-44	L-45
11	木	L-45	L-45
12	金	BOOK 3 テスト	
13	土		
14	日		
15	月	テストのKR情報	旅行準備
16	火	関東研修旅行	
17	水		
18	木		
19	金		
20	土		
21	日		
22	月	代 休	
23	火	アンケート & 手紙	レポート
24	水	レポート・報告会準備	報告会
25	木	復習(BOOK 2)	復習(BOOK 3)
26	金	分冊5/L.15 工業技術分野L1	分冊5/L.15 工業技術分野L3
27	土	L2	L4
28	日		
29	月	ニュースの日本語 工業技術分野L5	分冊5/L.15 工業技術分野L6
30	火	L.15/分冊L.6 工業技術分野L7	分冊L.6 工業技術分野L9
31	水	分冊L.6 L8 工業技術分野 L10	工業技術分野 L12

9月

月	曜日	午前	午後
1	水	沖縄南技能開発センターへの	
2	金	体験入学	
3	土		
4	日		
5	月	ニュースの日本語 分冊4 L4	L4・辞典制作導入
6	火	分冊4 L4	
7	水		
8	木	卒業プロジェクト・人名辞典制作	
9	金		
10	土		
11	日		
12	月	ニュース関係	L7申し出と許可
13	火	L7申し出と許可	L7申し出と許可
14	水	L2 水道の水	L2 水道の水
15	木	敬老の日	
16	金	L2 水道の水	L3石鹸工場の見学 報告会
17	土		
18	日		
19	月	ニュース・演習準備	浄水場見学 処理場見学
20	火	L3石鹸工場の見学	スピーチ指導
21	水	総復習	ゼミ予選大会
22	木	F.R 仕上げ・総復習	総復習
23	金	秋分の日	
24	土		
25	日		
26	月	中級テスト	
27	火	テストのKR情報	スピーチ準備
28	水	自主研修	
29	木	評議会スピーチ練習	
30	金	評議会	閉講式

(b) 中級シラバス

月日	曜	演習 内容	午 前	午 後	備 考	
8/23	火	レ	アンケート・手紙	レポート&報告会準備		
24	水	ポ	報告会準備	報告会(1:00)	報告会の後S/C&P/Hコースの	
25	木	初	復習(分冊2)	復習(分冊3)	ビデオ発表見学	
26	金	級 と 復 習	L15(水のカッター) 工業技術分野 L1-12	L15(水のカッター) 工業技術分野 L3-L4	ニュース	
27	土					
28	日					
29	月	職	ニュース関係 こうぎょう:L5	L15(水のカッター) こうぎょう:L6	ニュース スピーチ大会のアナウンス	
30	火	業 訓 講	L15 & L6 こうぎょう:L7(L8)	L6(ガス器具の説明書) こうぎょう:L9	ニュース	
31	水	練 義 所 を	L6(ガス器具の説明書) こうぎょう:L10	L6(ガス器具の説明書) こうぎょう:L12	ニュース ファイナル・レポート説明	
9/1	木	で 聞 く	沖縄南技能開発センターへ			
2	金		体験入学			
3	土	場 面 に 適 切 な 会 話 で き る O I C 人 名 辞 典 作 成				
4	日					
5	月		ニュース関係&L4	L4&辞典制作導入		
6	火		L4 依頼とことわり			
7	水		L4 依頼とことわり			
8	木		修了プロジェクト			
9	金		人名辞典制作			
10	土					
11	日					
12	月	工 明	ニュース関係	L7 申し出と許可	ニュース	
13	火	場 と	L7 申し出と許可	L7 申し出と許可	ニュース	
14	水	見 質	L2(水道の水)	L2(水道の水)	ニュース	
15	木	学 疑	敬老の日			
16	金	の 応 説 答	L2(水道の水)	L3(石鹸工場の見学) 卒業制作報告会	ニュース F、R第一回提出締切	
17	土					
18	日					
19	月	気 候 と 情 報	ニュース関係 演習準備	浄水場&下水道処理場見学		
20	火		L3(石鹸工場の見学)	スピーチ指導		
21	水		総復習	スピーチ・C子選		
22	木	関 ど	F.R 仕上げ・総復習	総復習	OICスピーチ・コンテスト F、R最終提出	
23	金	す り	秋分の日			
24	土					
25	日					
26	月	集 大 成	中級テスト			
27	火		テストのKR情報	スピーチ準備		
28	水		自主研修			
29	木		評価会のスピーチ練習	総まとめ		
30	金		評価会	閉講式		

④ 中級シラバス——日本語専修コース(A)(昭和63年度)

アウトライン

昭和63年度日本語専修コース(A)は8月25日(木)から9月30日(金)の間、中級日本語学習期間となる。その期間中のシラバス内容は以下の基本概念で構成されている。

(a) 分冊1～3の初級レベルでは、文法的難易度と学習の難易度がほぼ並行的に進行した構造的シラバスが中心であったが、中級ではこれまで以上に場面中心・機能的シラバスになる。

120時間という極限の時間数ということも配慮に入れ、言語習得の4技能の充実・発展をはかっていく。

(b) 事業団テキスト分冊4、5を用いるが、テキストの課の順の進行ではなく、特に4月に行ったフォローアップ調査で実施した学習者のニーズ分析の結果から必要性の最も高い領域を選択した。

必要性の高い領域から教えていくことになるので、文法・表現的にはかなり複雑なものから教えていくという可能性もある。それは自主作成の補助教材、特にタスク性の高い教材、また、マイクロスキル達成を目標とした教材等をその都度、担当講師が作成して補って行くこととした。

又、工業技術分野のテキストも職業訓練校への体験入学の際の講義を理解し、質疑応答ができるようにするという行動目標の達成のための補助教材として使用する。

(c) また、演習が中心になるので、演習内容に見合った課という選択もなされている。演習の内容は「職業訓練校への体験入学」「下水道処理場の見学」「气象台見学」「工場見学」等を予定しており、教室作業では、実地演習で必要となる背景的な語彙、表現、知識の習得を目的とする。演習とテキスト授業が有機的に絡み合い、日本語運用能力が効果的に発揮・発展されていくよう方向づけていく。

(d) 「ニュースの発表」「Whos' who作成」「手紙文の書き方」等の作業やプロジェクト・ワークを通して、日本の文化、歴史、社会、生活等に関する一般的な知識や理解も深めさせて行くこととする。

(e) 又、中級シラバス実施の過程で学習者の希望を勘案して、シラバスを手直し、学習意欲を促すというアポステリア・シラバスの利点も取り入れる。

⑤ 竜プロジェクト・ワーク

(a) 「手紙の書き方」

初級レベルで継続指導してきた作文練習の総仕上げという観点から、研修員の帰国後の高いニーズ性を考慮に入れ、主にビジネス・レターの書き方を中心に行う。(暑中見舞い、年賀状、お礼状、等の一般手紙類の書き方の指導も適宜取り入れて行う可能性もある。)(担当：西郡)

(b) 「Who's who」

ことばで自分の意見を言うとか物事を描写するだけでなく、なにかを成しとげるための日本語学習というタスク性の高いプロジェクトとなる。その際、会議を煩雑にもち、研修員自身が主体となり、お互いの分担、及び内容、計画を理解し、その結果から行動に結びつけるように方向づけていく。(担当：バン
トロイヤー・朋子)

(c) Speech Contest

6ヶ月の日本語学習、及び日本での研修の集大成という意味で、日本語コースの研修員全員が参加する形になる。センター全体の行事となると、他コースの研修員も自由参加になるので(学習時間でレベル分けする)、日本語専修コースからは、3人程度を選抜する。(担当：西郡)

(3) 日本語既知度

日本語既知度

昭和63年度 日本語専修コース (A)

	名前 (国名)	インタビュー 使用言語	発話のあった日本語	備考
1	A	英語 インドネシア語	*こんにちは *こんばんは *おはようございます *さようなら *どうぞよろしく *メガネ *のむ *あなたの家はどこに ありますか	日本語の質問1~3は理解出来た。 ・英語力がかなり弱い。
2	B	英語	*おはようございます *こんにちは *こんばんは *ありがとう *すこし *ちょっとまって *土曜日 *2~10	日本語の質問1~3は理解出来た。 ・あ行、か行のみゆっくり読める。
3	C	英語	*私は日本語わかりません *おはようございます *こんにちは *こんばんは *どうもありがとうございます *1、2、3、4 *友達	日本語の質問1は理解出来た。 ・英語力はある ・かなり知的 ・Computerに強い関心有り
4	D	英語	*研修員 *私 *先生 *こんにちは *1、2、3 *おりがみ	日本語の質問の2と3は理解出来た。 ・あ、か、さ行が読める ・両親は中国語で話す ・友人とはタイ語 ・おりがみ、書道に興味がある。
5	E	英語	*こんにちは *どうぞおかけください *おはようございます *こんばんは *ふたり *ありがとう *タイ語	日本語の質問1は理解出来た。 ・英語力抜群 ・知的
6	F	英語	*こんにちは *はじめまして *おはようございます *バイラムさん *こんばんは	日本語の質問1~3まったくわからない。 ・英語力がかなり弱い。
7	G	スペイン語	*どうもありがとうございます *こんにちは *おはようございます	日本語の質問1~3まったくわからない。
8	H	日本語 インドネシア語	*スブラプトです *インドネシアです *私は医者です	質問1~3にはスラスラ答える。JFCの中級クラスで学習していた。(週3回、各2時間)。計3ヶ月の日本語学習歴。

(4) 研修経過

授業の進行、野外活動、研修旅行等の軌跡の一覧を表5-1に示す。

また、中級授業の集大成として作成した「人、人、人、知っていますか。」を資料として加える。

研修の軌跡 (一覧)

日時	授業の進行	日時	授業外活動	内容および備考
4/18	開講式 分冊1学習開始 ひらがな導入 ひらがな習熟度 初級 カタカナ導入開始 漢字導入開始 (CAL 使用開始) 分冊1	4/11	オリエンテーション開始	
		4/22	野外研修 日本語サバイバル・ トレーニング	・国際通りで必要不可欠な日常表現
		4/29	Eating Out	・研修員と講師の外食親睦会
		5/20	野外研修 沖縄キリスト教短期大学と の交流会	・テイボーン先生とスピーチ・コミュニケーションのクラスと交流
		5/27	ビデオ制作	・分冊1の総復習という意味で本の対話を10話選び、役割分担をし、研修員自身の手でビデオ・ドラマを作成
		5/28	第一回ホーム・ステイ オリエンテーション	
		5/26	分冊1習熟度試験	
		5/30	分冊2学習開始	
		6/4 ~5	第一回ホーム・ステイ	
		6/7	お国紹介リハーサル	・自国について説明(大浜小との 交流会準備)
初級 分冊2	初級 分冊2	6/8 ~9	研修旅行1(石垣島)	・大浜小学校との交流会/お国紹介 ・島内見学など (引率:西部・久保田)
		6/13 ~22	中間インタビュー	・センター滞在2ヶ月目に問題点や希望などを個人調査
		6/17	沖縄キリスト教短期大学の 学生を館内案内	・テイボーン先生のスピーチ・コミュニケーションのクラスの学生を館内に招き案内及び昼食
		6/24	浦添市長表敬訪問	
		6/25	浦添市長宅訪問	・比嘉昇市長の招きで食事会
		7/4	分冊2習熟度試験	
7/4	分冊2習熟度試験	7/5	野外研修 お茶会	・座波建設の日本家屋・日本庭園で 研修課・山崎さん指導

(前項よりつづく)〔研修の軌跡(一覽)〕

7/6	分冊3学習開始 初級 分冊3	7/11~15	研修旅行2 京都・広島	・清水寺・平安神宮・映画村・平和記念館・マツダ自工等見学(引率:朋子・久保田)
		7/20	前田小学校への招待	
		7/20	3分間スピーチ開始	
		7/22	懸賞論文入選高校生との交流会	・懇談会及び夕食会
		7/23	てだこ祭り参加	
8/12	分冊3習熟度試験	7/26	健康体操参加	・速いテンポの日本語理解能力の養及び他コースとの交流
		7/28	漢字辞典の使い方・学習開始	・中級レベルへの下準備
		7/29	OICバーベキュー・パーティ参加	・職員・研修員の親睦会
8/25	分冊4・5学習開始 中級 分冊4・5	8/2	ニュース発表開始	
		8/6	第3回ホーム・ステイ オリエンテーション	
		8/13~14	第3回ホーム・ステイ参加	
		8/16~20	研修旅行3	・築地・科学技術館・国会・皇居・朝日新聞社・浅草等見学(引率:祖慶・金城)
		8/20	館外宿泊開始	・OICを離れサンパレス・ホテル宿泊
9/1	職業訓練所へ体験入学 「WHO'S WHO」制作開始 「人、人、人」報告会 スピーチ・コンテスト	8/24	関東研修旅行の報告会	・中級演習の一環
		9/1~2	野外研修 沖縄南技能開発センターへ体験入学	・中級演習の一環
		9/5~9	WHO'S WHO 作成	・日本語学習の総合演習
		9/10	OIC ビーチ・パーティ	
		9/16	WHO'S WHO 完成報告会	
9/22	中級習熟度試験	9/18	館外宿泊終了	
9/26	評価会	9/19	野外研修 浄水場・下水道処理場見学	・浄水場・下水道処理場見学
9/30	閉講式	9/21	日本語専修コース内のスピーチ・コンテスト予選	
		9/22	OIC スピーチ・コンテスト	
		9/28	沖縄気象台・コザ焼き見学	

(5) インタビューシート

昭和63年度日本語専修コース(A) 事前インタビュー結果まとめ

No	名前	出身国	生年月日	年齢	日本語能力				習得言語			備考			
					聞く	話す	読む	書く	母語	公用語	英語	その他	配偶者	子供	宗教
1	A	インドネシア	1966年 10月22日	22	0	0	0	0	インドネシア語	下	スラバヤ語	無	無	イスラム教	
2	B	インドネシア	1954年 12月22日	34	0	0	0	0	インドネシア語	中	ジャワ語	有	息子：8才 4才	イスラム教	
3	C	セネガル	1957年 9月18日	31	0	0	0	0	Wolof 語 フランス語	中	スペイン語 少し	有	娘：2才 1.5才	イスラム教	Computerに興味有り
4	D	タイ	1960年 12月16日	27	0	0	0	0	タイ語	中	タイ語 (中国語の方言)	無	無	仏教	おりがみ、習道に興味有り
5	E	タイ	1953年 1月26日	35	0	0	0	0	タイ語	上	無	有	1人	仏教	祖父は中国人
6	F	トンゴ	1957年 8月14日	31	0	0	0	0	トンゴ語	下	トルコ語の方言	有	娘：4才 息子：3才	イスラム教	研修後日本に残りたい Computer等に関心が強い
7	G	ペルー	1954年 4月14日	34	0	0	0	0	スペイン語	下の下	ケチュア語	有	5才 3才	キリスト教	やる気抜群有り
8	H	インドネシア	1935年 5月1日	53	1	1	1	1	インドネシア語	中	ジャワ語 ドイツ語	有	娘：23,19 息子：17, 14	キリスト教	JFC で3ヶ月日本語習0

第2回 インタビューの結果

6月13～6月22日間実施 研修開始後：9週目～10週目

No	研修員名	学			習			生			活			
		一日の学習量	宿題	課題	復習	予習	難易度の高い項目	問題点及び要望	日本人と話す機会	友人関係	趣味	日曜日には	食事	その他
1	A	3時間	1時間	Task L 10分 Task R 20分	30分程度	しない	高い項目	その他 ・CALは寝れる日本人の日本語と教室の日本語と違う ・特になし	少し前は日本人の女子学生と	みんなとよく話す	パトミン トン ジャマズ	コザへ行く	食堂で	国で日本語の先生になる
2	B	2～3時間		30分	30分程度	しない	漢字		ユムカイさんとケベさんと日本語で	Marine Courseのジョコさんと			スキヤキが好きな国の料理を作る	
3	C						聴解	週一回30分でも先生方と喋りたい	疏大で	みんなとよく話す	キックラック	散歩する		病院管理等について見学したい
4	D	4時間	3時間		少しだけ	しない		宿題の数が多く英語が添えないのが問題だ ・Communication 出来ない	アルベンチンのクワラサさんと			コザへ行く勉強する	ほとんど食堂で	
5	E	2時間		1時間半	宿題の少ない時のみ	します	漢字	CALは余り好きじゃない。時間がかかる	石蔵学校の学生と	IVORY Coastの研修員と	Basketball 話す水	宿題をする	食堂で ごはん・肉 ・魚が好き	OICの外に住みたい
6	F	1時間半	1時間	40分	授業で復習する CALは1度だけ聞く	文法30分 租税	漢字	宿題を減らしてほしい ・アムノイさんと日本語で文通している	ホイスの兄弟と	アノアップさんと	湖橋 パレール	宿題と掃除 タライの及遠 と買物に行く	食堂で料理を時々作る	身くで英語に慣れさせている
7	G	5時間	3時間	1～2時間	本を読む 特に文法事項を	期1時間 文法事項	新語彙 漢字	月～木まで宿題が多すぎる ・新語彙に交えてほしい ・教習用語を学習し、説明書を読みたい	フロントの8の人と	ケベさんとよく話す	魚鱈漬 ゴーカート	洗濯する	肉どんがき	前には5日間は京都・東京・大阪を回った
8	H	5時間半		1時間	しない	しない	漢字		オスカルさんと5時間学習する				ほとんど食堂で	奥さんへの手紙に日本語の翻訳を付けている

(6) 日本語集中講習評価表 (総合評価)

(評価日：昭和62年9月23日)

- ・ 日本語講習 第6回 ・ 研修コース名 日本語専修コース(A) (集団・個別)
- ・ 日本語講習期間 昭和62年10-昭和63年5月27日 (850時間)
- ・ 担当講師名 西郡仁朗、祖慶寿子、金城尚美、バントロイヤ一朋子、川中孝子、兼本敏、浜崎盛康
- ・ 到達目標の段階 I II III N

研修員名	個人別評価	日本語能力に関する特記事項	技術研修コース全般に関連しての特記事項
A	㊤ B C	すべての言語技能が満遍なく向上した。漢語を中心に語彙も豊富であり、文章力もある。研修最後の雑誌の制作では編集長を勤め、責任感の強さも見せてくれた。このまま伸びて欲しい。	「実施概要」の項参照
B	A ㊤ C	初級段階では、特に会話に優れていたが、それで満足した感がある。中級に入ってから余り向上が見られなかった。単純な内容の会話に終了した点が残念である。	
C	A ㊤ C	初級時で伸び悩んでいたが、着実に努力を重ね中級でその成果が見られつつある。漢字の恒常的な学習態度にも好感がもてる。クラス運営にも協力的であった。	
D	A ㊤ C	口が重く、初級段階では語学学習への適性が心配されたが、着実に努力を重ね個人としては相当伸びた。クラス内の相対的成績は芳しくないが、本人は充実感をもって研修を修了したと思われる。	
E	㊤ B C	論理的思考に非常に長けており、特に文法に優れている。他の技能も満遍なく伸び、沖絶果の外国人スピーチコンテストで銀賞を獲得したのは特筆に値する。	

(注1) 到達目標の段階の区分は次の通り。

目標段階	到達目標の内容
I	挨拶、通勤、食事等生活の基本的な場での日本語による日常会話ができる。
II	現場実習の場での必要な日本語の指示が理解できる。
III	現場実習の場での日本語による質疑応答ができる。
IV	日本語による講義が理解できる。

(注2) 到達目標に対する個人別評価欄の

- Aは、到達目標に十分達している。
 Bは、到達目標にほぼ達している。
 Cは、到達目標に達していない。

研修員名	個人別評価	日本語能力に関する特記事項
6	A B C	日本人とのコミュニケーションには非常に興味を持っているが、口頭表現にこだわらず書き緻密さに欠ける部分がある。クラススの人気者だけに学習においても主導的な役割を果たして欲しかった。
7	A B C	開講当初から進んで日本語だけで会話しようとする姿勢は好感が持たれた。単文レベルでは流暢な発話も見られるが、複文以上の発話・作文構成能力にはかなり問題がある。アクトメントに母語干渉がみられた。
8	A B C	若いのが精神的には成熟しており、頭脳明晰で満遍なく技能が伸びた。強いて言えば、筆記(特に漢字)が弱点である。
9	A B C	初級までは着実に伸びていたが、日常会話の日本人相手の応用に興味を持ち過ぎ、伸び悩んだ感がある。潜在能力はもっと高いと思われるので残念である。
10	A B C	発音への母語干渉がかなりあり、またその他の技能の面でも学習にかなりの苦勞があったが、絶えず明るく安定した精神状態で努力しつづけた。
11	A B C	着実に努力し続けた。クラス運営にも非常に協力的で、お姉さんの存在である。発音への母語の干渉に悩んだがスピーチコンテスト出場でかなり自信を持った模様。漢字履習は大いに伸びた。

JICA

